
ゆまゆま！

高杉零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆまゆま！

【Nコード】

N2276T

【作者名】

高杉零

【あらすじ】

俺の名前は神名悠馬。

自分で言うのもなんだが、ごく平凡な男子高校生って奴だ。

趣味も特技もなし。学校の成績も大して良くない。

ホント、どこにでもいるような奴なんだ……俺は。

そんな俺が、今年のゴールデンウィークに体験した、どうにも妙で不思議な話。

目が覚めた時……そこには、『ゆま』と名乗る見知らぬ少女がいた。

第壱話：そいつは突然現れた

いきなりだが自己紹介をさせて欲しい。

俺の名前は、かみなゆづま神名悠馬。十六歳の高校二年生だ。

……自分で言うのも凄く嫌なんだが、俺はごく平凡な男子高校生
って奴だと思っ。部活に所属してる訳でもなし。趣味やら特技やら
に特筆出来るものがある訳でもなし。学校の成績も中の下って所だ
し。運動神経だけは少なからずいい方らしいんだけど……自分じゃ
よく分らん。

こんな取り立てて誇れる所がある訳でもない俺だから、当然彼女
なんかいやしない。好きになった子には振られ続けても……いや、
数えるのも嫌になる。やめよう、この話は。

まあ何が言いたいかと言うとだ。とどのつまり、俺は『普通』な
んだ、って事。

何をもって『普通』なんだとか、そもそも『普通』って何なんだ
とか聞かれても俺には分からないし、そんな難しい事は考えるのも
面倒だ。だが、周りで見比べて頭が抜きん出る事のない俺は、やっ
ぱり『普通』って言葉が一番合ってるんだと思う。

たぶん、俺みたいな『普通』の奴は、それこそ当たり前のように
そこら中に溢れ返ってるんだろう。

例えば、自分が普段いる環境を思い描いてくれ。学校でも、職場
でも、どこだって構わない。

そういう所にさ。一人くらいはいるだろ？ あいつってあんまり
目立たないよなーとかって思えるような奴。そういう奴が俺なんだ
よ。

何かしらやりたい事がある訳でもない。追いかける夢がある訳で
もない。ただただ。過ぎ行く日々を無難に暮らし続けてきた。

……ちよっと待った。言いたい事はあるだろうが、もうちよっと
だけ俺の話を聞いてくれ。

いやな。俺だって別に今の状態で満足してる訳じゃあない。そりゃもつと目立ちたいと思うし、誇れる何かを持ちたいとだって思っ
てはいる。

……思っでは、いる。いるんだが……ぶっちゃけ何をすればそれ
が出来るんだかがさっぱり分からないんだよな。

と、まあ長々と語っちゃ来たが、要は俺は『普通』のごくごく一
般人なんだよ。

それを理解した上で この話を聞いて貰いたいんだ。

高校も二年生に上がって一ヶ月が経った、四月の終わり。世に言
うゴールデンウィークって奴が訪れたばかりの初日。

俺は、暖かく穏やかな陽の光に包まれながら、惰眠を貪り続けて
いた。

別に隠すつもりもないから正直に言えば、二日前に発売になった
ばっかのゲームを夜通しやり通して、夜が明ける前に床に就いた所
だった。布団に入ってから一時間も経ってなかったと思う。

凄まじいまでの睡魔に襲われてやむなく寝たはずだったんだが…
…何がきっかけだったのか、ふと目が覚めた。

「……ん……ん……？」

目は覚めたが目を開ける気になれない。そんな経験、誰しも一回
くらいあるだろ？ この時の俺がまさにそれだった。

寝たばかりで身体がちょうど休み始めた所だったんだろう。妙な
気怠さを感じながら、身をよじる。寝返りを打とうとしたんだよな。
そこで気付く。

「……ぬぁ……？」

身体が、動かない。

おいマジか。これが俗に言う金縛りって奴かと思って、とうとう目を開けようとした。

……今思えば、これが全ての始まりだった。

「……ん？」

『はぁーいーい』

「……………」

静かに目を閉じる。息を大きく吸い込み、ゆっくりと吐き出す。危ない危ない。ゲームのやり過ぎか単に疲れ過ぎか、どうやら幻覚が見えたらしい。

だってあり得ない話だろ。一人っ子で、親戚が居候してるなんて話も一切ない男子高校生の部屋で、同じ年ぐらいの女が俺の顔を覗き込んでいるなんて。

やれやれ。心を落ち着けて、と。

もう一度、目を開く。

『はーろおー』

直後、これでもかというくらいにガンッ、ドガッとあちこちに身体をブツけながら後退する俺。金縛りって話はどこ行ったって程の勢いだ。

……思い切り肩をベッドの淵にブツけた……痛え。

『んー……その反応は傷付くなあ』

「この状態の相手に対して最初に投げ掛ける発言がそれかよ!?!」
思わずツツコミを入れてしまった。

この時点で、既に日常とは全く違ったと言っても過言じゃない。ツツコミなんて、普段なら絶対にやらない事だ。心の中で思いながら、結局口に出さずに終わってしまうのが常なのに。

あまりにも思いがけない、あり得ない出来事に気が動転しきっていたのか。あるいは、もうこの時点で既にそいつの空気に当てられていたのか。

平々凡々を体現したような俺が、非日常の世界に足を踏み込んだまさにその瞬間だった。

『おお、気付いてくれた!』

「いや、流石に気付くって」

その距離じゃ、と繋げるのは何だか憚はたかられた。なにしろ、その女は俺の目と鼻の先に四つん這い状態で座ってやがったんだ。

俺は寝てた状態から無理矢理上体だけ起こしてベッドの淵に腰かけてるような状態。

……言わなくても分かるだろ。恥ずかしいんだよ。

「つつかお前誰だよ? 何でこんなトコにいんだ!？」

『おお! それって、ゆまに話しかけてくれてるんだよね!?? そのうだよね!?!』

ダメだ。会話になってない。

……って。

「ゆま? お前の名前か?」

『そうだよ。ゆまの名前は、ゆま!』

わざわざ言い直さなくても分かるんだが。しかし、ゆま……ゆまねえ。

記憶の中を探って行く。が、どれだけ思い出そうと思っても、目の前の女に該当する相手は一人もいない。

という事は、だ。

「なるほど、不当侵入って奴か」

『それを言うなら不法侵入じゃないの?』

……バカだと笑わば笑え。どうせ俺の知識なんてこんなレベルだよ。

『ゆまは不法侵入なんてしてないよ。気が付いたらここにいたんだもん』

「不法侵入するような奴は皆そう言うんだ」

『そうなの?』

んな訳ねえだろ。そう言おうとした所で、ようやく意識がはつきりしてきた。とりあえず状況を何とか把握しようと思いを巡らせる。

結果、把握出来た状況は二つ。

扉に鍵をかけた自分の部屋に、見知らぬ女がいる。
その女はあろうことが自分のベッドに潜り込んでいる。

……何なんだ、この訳の分からんいきなりの展開は。

『ねえねえ。あなたの名前は何て言うの？』

『へ？ あー……悠馬だ。神名悠馬』

『ゆーまかー。ゆまの名前に【う】を付けたんだね』

何でお前基準なんだよ。単に名前がちよつと似てるだけだろ。

つつか。何でお前はこの状況で平然としてんだよ。

『ねえゆーま。ゆまは何でこんな所にいるの？』

『俺が知ってる訳なくねえか！？』

それを俺が知ってたら凄えだろ！？ そんなの俺が知りてえつて

の！ むしろお前が教えるよ！

とりあえず強盗やら泥棒やらの類じゃなさそうだなと思い、抱いた疑問をブチ撒けてみる事にした。

「つつーかお前、どうやって入って来たんだよ。家に鍵だつてかか
つてるし、部屋の扉にだつて鍵あるんだぞ？」

『知らないよ。気が付いたらここにいたんだつて言ってるじゃない
それをどうやって信じるって言っただ、こいつは……。』

……と。そこである事に俺は気付いた。

『お……お、お……』

『お？ おお？ きーなのっぱのふるどーけいー』

『おおおおお前！？ 何で浮いてんだ！？』

『へ？』

俺に指差され、初めてゆまは自分の手と脚を見る。

ベッドについていたはずのそれは……明らかに宙に浮いていたん
だ。

『あれー？ ゆま、何で浮いてるんだろー？』

『何でそんなにのほほんとしてやがんだよ！？』

ツッコミつつも、それまで気恥ずかしさからきちんと直視してこ
なかつた少女 ゆまの姿を改めて確認する。

白いワンピースを着込み、肩にさえ届かない程の髪が顔の動きと連動してほんの少し揺れている。それだけ、と言えばそれだけの格好。

正直、可愛いと思った。

およそ俺の人生の中で、ここまで可愛い女子と出逢える事なんてあり得ないだろうと本気で思える。学校にだつてそりゃあ可愛い女子の一人や二人いるが、やれあいつは何たらクラスの誰かさんと付き合ってるだの、やれあいつは誰かさんと誰かさんで二股かけてるだのと聞きたくもない噂ばかりが耳に入つて来るんだよ。あーテンション下がるぜちくしょうつてなもんだ。

それと比べたら、この目の前にいる少女はそういつた噂なんかとも縁遠そうな　ある意味で”真っ白だ”と思えるような女子だった。

だが……そんな事よりも気になる事がある。

よく見れば、彼女の身体はほんのりと霞がかつているようにも見えた。色素が薄いとでも言えば良いのか。全体的に薄ぼんやりとしていて、何となくはつきりしない。

そして、彼女は自分の前で浮いている、というこの状況。

「まさか……お前。幽霊つてんじゃねえだろうな？」

自分で言つてもそんなバカなと思えなかつた。

そんな発言に対して、ゆまはキョトンとしながら平然と返して来る。

『幽霊？　ゆま、幽霊なの？』

「だから俺が知ってる訳ねえだろうっつもの！？」

大体、『幽霊なの？』なんて聞かれて答えられる奴なんかいねえよ。

あーもう。訳分かんねえぞ。

「結局、お前何なんだよ？」

『ゆま』

「名前は知ってたんだよ。どっから来た？」

『分かんない』

「何しにウチに来た？」

『分かんない』

「お前ん家はどこにある？」

『分かんない』

おいおい。迷子のガキかこいつは。

そういやちよつと子供っぽい感じがしなくもない。

「歳は？」

『ゆーまはいくつなの？』

「俺か？ 俺は十六だけど……」

『じゃあゆまも十六！』

「じゃあ！？ 今じゃあつつたか！？」

『うん！ 十六！』

「うんじゃねえよ！」

だああああッ！ 何なんだよこいつは！ 話が全然先に進まね

えじゃねえか！

『だって……全部分かんないんだもん』

……………。

何ですと？

「全部つて……全部？」

『うん。歳も、どこから来たのかも、何でここにいたのかも、今ま

で何してたのかも、全部』

……………ダメだ。言ってる意味が理解出来ない。

『ゆま、自分の名前しか覚えてないの。さつきから思い出そう思い

出そうって頑張ってはいるんだけど……何も思い出せないの』

「何だそれ。記憶喪失って奴か？」

『なのかなあ』

わー。救いがねえー。そんなんどうしろっつーんだ。

『さつきね。ここで気が付いた時、ゆーまが寝てたからその間に出て行こうと思ったの。だけど、出来なかったの』

「はあ？ 何で？」

『分かんない。出て行くこととしたら、思いつ切り後ろから引つ張られるみたいな感じで……ここから離れられないみたいなんだもん』
何だ何だ。一体どういう事なんだ？ 嘘言ってるっぽい感じでもねえけど……。

『仕方ないから漫画でも読んで時間潰そうと思ったんだけど……それも読めなくて』

「ちよつと待て。って事はテメエ、人の部屋勝手に漁ろうとした訳か」

『何かねー。本とかが持てないの。触ろうとしてもスカツスカツてなつちやつて、全然触れないんだよ』

「軽くスルーしてんじゃねえよ！ そういうの泥棒つつーんだぞ！？」

何でこいつはこう人の話を聞こうとしねえんだよ！

それとも俺か？ 俺なのか？ この状況をおかしいと思ってる俺だけがおかしいのか！？

……この状況？

「……ははあ……なるほど。そういう事が。分かった」

『何か分かったの？』

俺は全てを理解した。これ以外に、答えと呼べるものは存在しなかった。

さあ、全てを終わりにしてやるんだ、俺。

『……ゆーま？』

「あん？ 何だ？」

『何で布団被り直してるの？』

「これは夢だ。俺の妄想だ。彼女もいねえ俺の見る悲しい幻想って奴なんだ。だから寝る。寝れば治る。現実に戻れる。だもんだからおやすみ」

いやはや全く。随分と悲しい夢を見ちまったもんだ。

さて。現実の俺は今もまだ深い夢の中にいるはずだ。とつと目

覚めて、この訳の分からない空想世界とおさらばしよう。

『ゆーま？ 空想世界ってなあに？ ゆーまー？ ゆーまってばー？』

じゃあな、空想世界の住人よ。勝手に創り出して悪かったな。俺が目覚めたら何もかもなかった事になる。許せ。

もう二度と……会う事はないはずだ……から……。

（一時間後）

『あ。ゆーま、起きた？』

「夢じゃねえのかよおおおおッ!？」

こうして、俺とゆまの奇妙な生活は始まりを迎えたんだ。

第貳話：誰にも見えない少女

「……はあ……」

まだ昼下がりの商店街の一角。ごく一般的な日本の街並みにはあまりにもそぐわない豪勢な噴水広場の片隅で、俺は小さく溜息をついた。

理由はあまりにも簡単だ。二言で済む。

『おー！ 水綺麗ー！』

……こいつが、いるから。ほら二言。

今朝、突然俺の目の前に現れた少女　ゆま。

夢の産物かと思いきや、寝直そうが頬をつねろうが頭を壁に打ち付けてみようが消えやしない。そのせいで親が起きちまって、休日だつてのに朝っぱらから騒ぐなとしこたま怒られた。

理不尽だろ？　理不尽だよな？　俺のせいじゃないんだぜ？　全ての元凶は俺の隣でフヨフヨ浮いてやがるこいつなのに……。

『あ、犬だ！　犬がいるよー！』

「ぬあッ！？　ちょッ、こら！」

不意に右腕を引つ張られるかのようにつんのめり、倒れないように何とか踏み止まる。

が、俺の右腕は誰にも引つ張られたりしていない。

『ちよつとゆーま。ゆまに合わせて動いてくれないと、動けないんだよ？』

だよじゃねえ！　勝手に動き回るなつて何度も言つたる！

『だって可愛い犬がいたんだもん』

だもんでもねえ！　じつとしてる！

『ぶー……』

とまあ。ここに着いてから終始こんな感じな訳だ。あー面倒くせえ。

さて、ゆまが不貞腐れてる間に、朝から今までに分かった事を語っておこう。

色々試した結果、ゆまが夢幻の産物じゃないらしいって事が分かった後、目も冴えちまったから飯でも食おうと俺はベッドを下りたんだ。

『どこ行くの、ゆーま?』

「飯でも食って来る。お前はそこにいろよ」

『えー? 何でー?』

「ここを離れられねえんだろ? じゃあしゃーねーじゃん」

『ゆまもご飯食べたい!』

「無茶言うんじゃないやねえ。突然押し掛けて来た知りもしねえ女に食わせる飯なんぞ、ウチにはねえ」

『ぶー! ぶー!』

ぶーとか口で言いながら不貞腐れる奴、俺は生まれて初めて見たぞ。

そんな事を思いながら、扉を開けて部屋を出ようとする。
と。

『お? あれ?』

「ん?」

ふと聞こえた声に振り返る。

ついさっきまでベッドの上で不貞腐れていたはずのゆまが、ベッドを下りていた。

……いや、下りるってのはちょっと違うか。浮いてるだけだから。

「何してんだよ。ここにいろって言ったろ?」

『何もしてないよ。急に引っ張られたんだもん』

「はあ? 誰もいないのに何に引っ張られんだよ?」

『そんなの知らないよ』

また出た。ちくしょう、こいつはさつきから何かって言うと『知らない』『分かんない』のオンパレードだ。

相手してられっかと部屋を出る。

ウチは二階建ての一軒家。元々祖父母と一緒に住んでた事もあって二世帯住宅だった所を、祖父母が亡くなった後に一世帯に改築したんでそれなりに広かったりする。

でもって、俺の部屋は二階。両親の寝室やらリビングやらは全部一階にあるから、何かしようと思ったら必ず下に行かなきゃならない。実に面倒な構造だ。たまに寝惚けると階段を踏み外しそうになる事がある。さりげなく急なんだよ、ウチの階段。

とりあえず食える物を確保しようと、階段を降りようとする。

『お？ おー？』

「あん？」

また、声が聞こえる。

見ると、ゆまが部屋の扉の前でフヨフヨと浮いていやがった。

「な、何だ？ 出れんじゃん、お前」

『あつれー？ さつきは全然出られなかったのに！』

「良かったな。出られたんならどこへなりとも行っちゃまえ。俺は優雅に飯でも食う」

『べーだ！ ゆーまの意地悪！ 分かったよ、いなくなっちゃおうから！』

何でそんな罵倒を受けにやならんだ俺は。

まあいい。これで面倒事は消えたんだと安心して階段を降りようとした時だった。

「……ん？」

不意に、身体がフツツと持ち上がるような感覚に見舞われた。

続けて、まるで猫のように首の後ろを持ち上げられ、バランスを失う。

重ねて言うが、俺がいたのは階段だ。しかも、降りようとして片

足を上げてたタイミングだ。

……わざわざ言わなくても分かるよな。この後俺がどうなったのかくらい。

「おおおおおおッ!?!」

ドツタンバツタンと盛大な騒音を掻き鳴らしながら、俺の身体は階段を転がり落ちた。

……漫画かよ、マジで。

「いっつつつ……」

肩やら腰やらを思い切り打ちつけた……何なんだよ今日は。厄日か？

痛みに耐えながら、何とか立ち上がる。

と、そこへ。

『あれ？ あれッ？』

という声と共に、

「お？」

クイツ、クイツと首の後ろを引っ張られる感覚が再び。

上では、浮いたゆまが飛び立とうとしてるんだか何なんだか。何かに阻まれてるっぽく、失敗している模様。

……おい、どういう事だ。

『んー……どうもゆまが離れられないのは、部屋じゃなくてゆーまだったみたい』

「はぁッ!?!」

後で色々試して分かった事なんだが……ゆまが俺から離れる事が出来ないってのはどうやら本当らしい。

俺が移動すると、ゆまも勝手に移動する。逆にゆまが移動すれば、俺が勝手に移動しちゃうんだ。

何て言えばいいんだろうな。俺とゆまの二人が、大きな球にすっぽり収まっているって考えて貰うのが一番早いかもしれない。どっちかが動くとその球が動いちゃって、もう片方も動かざるをえない、って訳だ。

つまり、俺とゆまはある程度しか離れられないって事。具体的に測った訳じゃねえけど、最大で大体四、五メートルってトコか。ゆまが、俺が寝てる間に出て行こうとして出来なかったって言ったのが、どうやらこれのせいらしいんだよな。

これだけでも十分な程驚きを隠せないんだが、分かったのはこれだけじゃなかったりする。

「うるさいね！ 何してんの、このバカ息子！」

「ゲツ！？」

勢い良く開かれた扉と共に顔を出すウチのお袋。

ヤベエ！ ただでさえ寝起きのお袋は機嫌悪いってのに、女と一緒にいる所を見られたりなんかした日にゃ……この上ない地獄が待っている事は間違いないねえ！？」

「朝っぱらからドツタンボタンと……せつかくの休みくらい親をゆっくり寝かせてやるうなんていう、ちよつとした親孝行の心はないのかい！？」

……おりよ？ もしかして、気付いてらっしゃらない？

チャンスだ！ このまま隠し通せれば俺が理不尽な地獄を見る事もな

『ねえねえゆーま。この人誰？』

なああああんでこのタイミングで出て来やがりますかテメエはああああッ！？」

『タイミング？ 何言って……』

死んだ！ 俺、間違いなく死んだ！ 天国のじーちゃんばーちゃん、俺もこれからそっちへ参りま

「ったく。次やかましくしたら……アンタ処刑」
ボタンと閉じられる扉。

……あり？

助か……った？

『ねえねえゆーまってば。あれ、誰？』

「うるっせ」

だんだんだん！

思い切り叫ぼうとして、それを阻むように叩かれた寢室の扉にビ
ビり、俺はゆまにジエスチャーで部屋に戻れと伝えた。

そして今に至る……と。

正直な所、家にいると生命の危機を感じそうだったんで外に逃げ
て来たんだが……そのおかげでさらに分かった事が二つある。

まず一つ目。

どうも俺以外の奴にとつて、ゆまは存在してないらしいんだ。

気付かないってのはまた少し違う。文字通り、存在してない。

ここに来るまでの間に結構な数の人とすれ違ったが、誰もゆまに
気付いた奴はいなかった。見えてもいないし、声が聞こえてもいな
い。

知り合いに見られたらマズいと内心ビクビクしていた俺だったが
……あまりの反応の無さに拍子抜けしちまった。

これが、単に女を連れてるだけだったらまだ分からない話じゃな
い。俺を知ってる奴なら飛んで驚くようなシチュエーションだが、
知らない奴から見たらまああり得ない光景じゃないかもしれないか
らな。

けどな。俺についてくるゆまは宙に浮いてるし、ワイワイガヤガ
ヤとやたらめったら話しかけて来る。傍を通過ってこれで気付かない
訳がない。

道すがら、近所のおばさんが飼い犬を連れてたんで試しに話しか
けてみた。当然おばさんは全くの無反応。はてさて犬の方とは思
いきや、これまた無反応。

犬猫は人間が気付かない霊にも反応する、なんてのをテレビで見

た事があつたから試してみたんだが……余計訳が分からなくなつた。でもって二つ目。

どうやらゆまには、俺の心の声って奴が聴こえてるらしい。

どうも所々会話が噛み合つてないというか、突拍子がねえなと思つてたんだが、俺の心の声と会話してたつて事みたいだ。

……あれもこれも『らしい』つて状態なのが凄く嫌なんだが。

だが、この二つから導き出せる結論は一つ。

ゆまは、俺にしか見えない存在だ。

他の奴じゃ、見えないし話せない。声を聞く事も出来なければ、触る事も出来ない。

何でだかは分からないが、俺だけがそれを出来る。

……はっ。何だこの面倒な話。考えてて泣けて来たぞちきしょう。

『ゆーま。ゆーま』

ん？ 何だよ？

『色々考えてる所悪いんだけど、いつまでここに居るの？』

悪いと思うなら人の思考を読まないで欲しいと思うのは俺だけなんだろうか。

もう少しだ。これからちょっとやりたい事があるんだよ。

『やりたい事？』

そう。別に何もする事がないから噴水広場でのんびりまったりしてる訳じゃない。目的はある。

時計に目をやる。午後一時四十分。

「……つかしいな。そろそろ来ててもいい頃なんだけど」

「もう来ている」

「おうわッ!？」

び、びびび、ビビッたあッ!？

背後から突然話しかけてきたそいつは、ゆっくりと俺の目の前に現れる。

「い、いつからいたんだよ、孝明？」

「十五分程前だな。一時半に噴水広場の時計の下という事だったの

で、その時間に間に合うように来たのだが」

「そんな前からいんなら声くらいかけるよ！」

「その言にも一理あるが……どうにも考え事をしているようだったのでな。しばし待つべきかと」

「待たなくていいっつもの！」

「まったく……。こいつはどうしてこういらぬ気を遣うのかね。」

そつまたかあき
相馬孝明。俺が通う高校でのクラスメートだ。

興味がないので覚えてないんだが……何とかって言う古武道道場に通っているって聞いた事がある。そのせいなのか何なのか、こいつの言葉遣いは妙に古臭い。

佇まいは男の俺から見ても格好良く、学校でもかなりの数の女子に好かれているというムカつき野郎だ。

まあ、本人は別の学校に通ってる幼馴染と付き合ってるから興味はないそうだし、普通にいい奴だから仲良いんだが。じゃなけりやわざわざ休日に男を呼び出したりなんかしねえよ。

「それで、用件とは何だ？ 今日でなければならぬ用だと電話では言っていたが」

「ああ、その事なだけだ」

そこまで言いかけて、ゆまの方を一瞥する。

ゆまの奴……孝明に纏わりつくように眺めてやがる。何してんだよ、テメエは。

でもま、とりあえず第一段階はクリアだな。

「どうした、悠馬？」

「あーいや、何でもなし。実はさ。俺、お前に飯奢るって約束してただろ？」

「ああ。この間のテストで勉強を見てやった時のあれか。別にそんなものはいらんと言ったと思うが……」

「お前がいらなくても、俺の気が済まねえんだよ。飯ぐらい奢らせろって」

「だとしても、別に今日でなくても良い話なのではないか？」

「休み明けたら金なくなっちまうって。思い立ったが吉日。行こうぜ行こうぜー」

そう言っつて俺は孝明の肩を押す。

行くぞ、ゆま。

『どこ行くのー？』

そうだな……とりあえずその辺プラプラと。しばらく歩いたらゲーセンでも行くか。

『ゲーセンって何？』

ゲームセンターの事。いいから行くぞ。ついてこいよ。

『はい』

軽い返事と共にゆまもついてくる。

無論、俺の目的は孝明に飯を奢る事じゃない。

ゆまの存在は本当に他の奴にバレないのか。それを確かめる事が今日最優先の目的だ。それが出来ない限り、俺はこの先ずつと安心出来ない。何で俺がそんな事気にしなきゃいけないのかは甚だ疑問なんだけどな。

悪いな孝明。お前の事利用させて貰うぜ。

第参話：一人じゃないから

「お待たせ致しました。ジャイアントチョコバナナサンデーでございます」

「すまない。礼を言う」

「いえいえ。それでは失礼致します」

言いながら店員は下がって行く。

……っつーか。

「お前はまたのっけから甘そうなもん食うな……ジャイアント何だっつて？」

「ジャイアントチョコバナナサンデーだ」

「……お前さ。そんなん食って胸焼けとかしねえの？」

「それ程やわな鍛え方はしていない」

「ああそーすか」

鍛え方とかそういう問題なのか、なんてツツコミはしねえよ。もう今更だからな。去年出逢って以来、何回そのツツコミをしてきた事か。もう言っても無駄だって事はよく分かったんだよ。

この目の前にいるイケメン野郎はな。この上ないくらい甘い物が大好きな奴なんだ。渋い番茶と甘過ぎない茶菓子とかが好きそうな顔してやがるくせにな。

この上ないって言うくらいだから、彼女さんと同じくらいなんだろう。

まあ、その話はいいか。

『いいな！ いいなーッ！』

ほれ。甘い物なんかチラつかせるから面倒くせえのがさらに面倒くさくなってやがる。

『ゆーま！ ゆーまッ！ ゆまもッ！ ゆまも食べたいー！』

アホぬかすんじゃないやねえ。お前、スプーンも触れないのにどうやって食う気だよ。

『だって食べたいもん!』

あー。グチグチうつせえな。

ゆまの声はどうも耳じゃなくて頭に直接響いてるらしくて、無視すんのは至難の業だ。周りがどんなにザワついてようが関係なしに聴こえて来るからな。

『いーじゃん! ゆまも食べたいーッ!』

やかましい! これ以上騒ぐんじゃねえ!

『じゃあゆーまが食べてよ!』

何でそうなるんだよ……。

『ゆーまが食べたならゆまが食べた事になるから! 食べて!』

「なんねえよ! つつつか食つか! そんなもんッ!」

思わず声を上げる。

その瞬間、ザワついていた店内が一気に凍った。

ヤベエ。どうしよう。

「……心配しなくても、お前には一口もやらん」

……へ?

「何だ、サンデーの話じゃん」

「ビックリしたよ……急に大声なんて出すから」

「どんだけテンション高えんだよな全く」

た……助かったのか?

つてか、何で俺がこんな目に遭つとんじゃ!?

テメエのせいだからな……ゆま。

『人のせいにしないのー』

誰がどう考えたつてお前のせいだろが!

あーもう。こいつと話しているとマジで疲れるわ。

「どうした悠馬。いつも大して落ち着きはないが、今日はいつにも増して落ち着きがないな」

「なあ、それってけなしてるよな!? 全くもって持ち上げる気ねえよな!?!」

「無論だ」

「即答だなおい!？」

「いつも言っているだろう。男子たるもの、常に即断と

「即決を心がけるべし、だろ。もう何度となく聞いているよ」

耳にタコが出来そうだが、いやマジで。

だが……これでどうやら確定したな。

ゆまの存在は、本当に誰にも見えてないんだ。声も聴こえてない。心配を感じる事もない。

もう孝明と待ち合わせてからかれこれ三時間が経とうとしている。

その間、結構色々な所へ行ってみた。ゲーセン、本屋、でもって喫茶店と。

どこに行ってもゆまははしゃぎっ放しで……どこに行っても、彼女に気付く奴はいなかった。

俺としては安心するばかりだったけど……ふとここへ来て、もう一つの疑問が生まれた。

ゆまは、どう感じているんだろう。

『うー……甘いの食べたいよう……』

こいつには俺の心の声が聴こえる。だから、きっと俺がこいつやっ
て考えている事だっ
て分かってるはずだ。

こいつは誰にも気付かれない。騒ごうが、はしゃごうが、喚ごう
が。俺以外にその声は聴こえない。

それを、ゆまはどう思うんだろう。

「馳走になった」

「もう食い終わったのかお前!？」

「何ならお前の分も頂こう」

「どんだけ食いてえんだよ!」

「やー、投げた倒した！ やり切ったぜー！」

「前半は調子が悪そうだったが、後半の追い上げは凄まじかったな。正直驚いたぞ」

「つたりめーだ。絶対調ならもつと行けたぜ、たぶん」

俺のベストスコアを舐めんよ。これでも週に二回は通ってるマ
イボール持ちだぞ、俺ってば。

あ。何の話かってと、ボーリングの話な。

最初の方は俺の近くでフヨフヨ浮いてるゆまが気になって集中出
来なかったけど、途中から波に乗れてスコアが伸びた。

ちなみに、孝明は運動神経メチャクチャいくせに球技になると
上手く感覚が掴めなくなるらしい。やっぱ人間、得手不得手っての
はあるもんなんだな。

「……む？」

「お？ どうした？」

「すまん。電話だ」

そう言って孝明はポケットから携帯電話を取り出す。

……何で取り出しもせずに電話かメールか分かるんだってツッコ
ミはなしにしとけ。きつと何かが違うんだ。振動する長さとかその
辺が。

「ああ、俺だ……む。もうそんな時間か……分かっている。今日は
悠馬と少しな……」

あーやれやれ。どうやら幼馴染の彼女さんだね、ありゃ。

「ゆーま、あんなんじゃないやダメだよー」

あん？ 何がダメなんだよ？

『さっきのボーリング』

何だこいつ。俺の華麗な投球にケチつけんのか。

まさか自分の方が上手いとか言い出すんじゃないやねえだろうな。そん
なの確認のしようがねえぞ。

『あんなに一杯倒しちゃって。ちゃんときれーに、避けてあげない
とピンが可哀想じゃない』

そーゆーゲームなんだよ！ピン倒さないの意味ねえの！

ダメだこいつ。そもそもゲームのルールを理解してなかった。

今時ボーリングのルールも知らねえ奴がいるとは……ホントこいつは俺の予想の範疇を容易く超えて行きやがる。

「悠馬」

「ん？ ああ、電話終わったのか。彼女さんだったんだろー？」

「ああ……それでな」

あ？ 何だ？ 何か凄い言いにくそうな事言う時の顔してねえか？
わ。何かとてつもなく面倒事の予感。

「どうやらさっきのボーリング中に何度か電話をされていたらしくてな……」

「ありゃ。流石に投げてる最中は携帯なんか持ってやんねえもんな」

「うむ……それで、どうも少し憤っているようだ」

「ははあ……『電話したのに出てもくれずに、友達と遊んでるって
どういう事ー！？』ってな感じか？ やだね全く最近の女子と来たら。
相手が自分以外と遊んでるだけで嫉妬しやがんだから。」

あ。別にそんなのは女に限った話じゃねえか。

「……『浮気するなんて許せない』と言ってきた」

………はい？

「あんだって？」

「『浮気するなんて許せない』と言ってきたのだ」

「今すぐ彼女んトコ行ってその無駄かつ方向性を完全に間違え切ってる誤解を解いてこいッ！！」

「浮気って何だよ！？ 男同士で遊んでのに浮気とか言われんのか！？ 天然なのか！？ ボケなのか！？ それとも真面目に言うてんのか！？」

「どれにしたって嫌な事この上ないわあッ！！」

「む。良いのか？」

「良い良い。つつか、そんな突拍子もねえ誤解されちゃ俺の方がかなわねえよ」

割と本気でな。

「分かった……だが、悠馬」

「どしたよ？ いーから行けって。待ってんぞ、彼女」

「お前も気を付けるのだぞ」

「あん？ 何に気を付けるってんだ？ 俺も孝明みたいに浮気だとかって誰かに誤解されるって？」

んな訳ねえだろ。そもそも浮気なんてのは彼女がいて初めて成り立つものであって、生まれてこの方十六年間誰とも付き合った事のねえ俺には、そんなのは無縁の話題でしか

「いや。お前の顔に影が見えるのだ」

……何？ 今、何て言った？ 顔に影が見える？

孝明は至っていつも通りのクソを付けてもまだ足りなくらい真面目な顔で続けた。

「昔、誰かに聞いた事がある。顔に影の見える者は……近い内に運命の転機を迎える者だと」

「はあ？ 運命の転機？ 何だそれ？」

俺はテレビの天気予報さえ信じようとしなない男だぞ。

……なんてくだらねえダジャレを言えるような空気じゃないな。

「運命とは自らの歩む道。転機に差し掛かった者は自らを試されるのだと言う。そこで道を違えれば……二度と戻っては来られなくなる」

俺の何を言ってるのか全く理解出来ないという表情を無視するかのように、孝明は続ける。

「転機とは選択するべき箇所。お前は選ばなければならないはずだ。何をかは分らないが」

それから孝明は大きく息を吸い込み 俺を諭すようにこう繋がた。

「何を選ぶにしろ、お前自身が歩む道だ。後悔をしないよう……自身の手を掛けて選べ。でなければ、お前はお前自身を恨み続ける事になってしまう」

この瞬間の孝明の瞳を、俺は今でも鮮明に覚えてる。

俺を真っ直ぐ見ているようで……どこか違う所を見ているようでもあった。その目線の先に何があったのかは今でも分からない。が、少なくとも俺にはそう思えた。

「それだけだ。お前なら大丈夫だとは思うが……気を付けるよ、悠馬」

「へいへい、わーったわーった。分かったから早く行け」

「うむ。それではな」

軽く手を振って、孝明はその場を後にした。

正直な所、この時の俺は何を言われたのかがさっぱり分からなかった。と言うより、そんな難しい事言ってる暇があるならとっとと彼女のトコに行ってやれよ、という気持ちで一杯だったんだ。

だから 孝明の言葉の意味を知るのは、もう少し後の話になる。

「……なあ。ゆま」

「ん？ なあに？」

帰り道。誰も周りにいない事を確認した上で、俺はゆまに話しかけた。

抱いた疑問を聞いてみよう、と思ったからだ。

「あのさー」

「何ター？」

……う。そんなに目を見開きながら人の顔を覗き込むんじゃないよ。何か凄え言い出しにくいじゃねえか。

「何なのさ？」

「いや……」

少し躊躇ためらって……俺は改めて口を開いた。

「お前って、結局何なんだろうな」

『……………どういう事？』

俺が何を言ったのか、その意図を理解しかねたんだろう。ゆまはキョトンとした顔のまま、首を傾げていた。

構わず、続ける。

「やーさ。今日色んなトコ行って色々試してみて……………お前が誰にも見えないし、お前の声が誰にも聴こえないって事は分かったんだよ」
『うん』

「犬やら猫やらもスルーするって事は、お前、単に幽霊って訳でもなさそうじゃん」

『んー……………どうなんだろう。自分でもよく分からないからなあ』

何でお前の方が俺より興味なさそうなんだ。

……………ちっ。何か俺の方がイライラしてきたぞ。

「お前さ。一体どう思ってる訳？」

『どうって……………何を？』

本当に分かんねえのか？ それとも何にも考えてねえだけなのか？
何でそこまで能天気でいられんだ？

普通に考えろよ。お前自身の事なんだぞ。

「だから。誰にも見えないし、誰にも聴こえない。誰にも気付かれないって事をだよ」

ほんの少しだけ、俺の語気が荒くなる。

今日一日話してみても分かった事が、実はもう一つある。

俺には、ゆまの考えが理解出来ない。

それは単純に興味の持ち所がおかしいとか、何と云うか無駄に明るいつか、そういう事じゃない。

こいつは俺にとって、あまりにも捉え所が無さ過ぎた。

自由奔放と言えば多少は聞こえがいいのかもしれない。何にも縛られる事なく、自分を曝け出せる。今の 特に俺達のような若い世代には本当の意味で欠如してる能力だと思う。そういう意味では憧れこそすれ、不安に思う事でも何でもないはずだ。

だが　それだけじゃない。

ちよつとでも捉えようとすれば消えてなくなってしまいそうな。そんな弱々しさを、俺は感じたのかもしれない。

「いいのかよ、それで。そんなんじやつまんねえだろ？　寂しいだろ？」

俺がもしゆまと同じ立場だったら……それは、とてつもなく寂しい。

だつてさ。たかが高校生の俺が言うのも変かもしれないけど、人なんて一人じゃ何も出来ねえんだぜ？

遊ぶ事も。楽しむ事も。笑う事だつて一人じゃ出来ないんじやないかとさえ思える。

それつて、すつごくツラくないか？　少なくとも俺だつたら耐えられないような気がする。

そんな経験ないから想像するしかねえけど……。

『大丈夫だよ』

「……え？」

不意に返つてきた返事に、俺は素つ頓狂な声を上げてしまった。

ゆまは、続ける。

『一人じゃ確かにツラいんだろうと思う。誰にも気付いて貰えないのは……きつと凄く寂しい。ゆーまの言う通りだと思つよ』

「だつたら」

『けどね』

少し俯いていたゆまが顔を上げる。

その顔は、とても優しく微笑んでいた。

そして、言った。

『一人じゃないから』

「……は？」

この時の俺が何を思ったのか、正直に言おう。

何を言い出したんだこいつは。素直にそう思った。

お前は一人だろつて。誰にも見えないし、誰にも気付かれないん

じゃ、何をどう頑張ったって一人じゃねえかって。

そう、思った。

それを踏まえてなのかどうか。ゆまは優しく言葉を紡ぐ。

『一人じゃないんだよ。だって……ゆーまがいるから』

「……俺？」

『そう。だって、ゆーまにはゆまの事が見えてる。ゆーまにはゆまの声が聴こえてる。今日の朝、ゆーまはちゃんと気付いてくれたもん。だから大丈夫。一人じゃない』

そう言ったゆまの顔が、あまりにも優しくて。

『もし、ゆーまが気付いてくれなかったとしたら、たぶん泣いちゃってただろうな』

あまりにも、優し過ぎて。

『あ。だからって無視するとかヤだよ？ そんな事したら、本当に泣いちゃうんだから』

「……なら、明日からがつつり無視してやるぜ、こんちきしょう」

『えーッ！？ 何で！？ どうしてそういう話になるの！？』

「うつせえ、黙れ。とりあえず帰んぞ」

『ゆまの質問に答えるー！』

「うつせえってんだろが！ 頭に思いつきり響くんだから喚くな！」
いつまでなのかはよく分からねえけど……もう少しだけ。

このままでもいいか、なんて思ったんだ。

第肆話：合わせ鏡の間

『うっわー！ 凄い凄ーい！』

うっわー。凄い面倒くさーい。

『ゆーま！ あれ見て、あれ！ すっごく高いよー！』

あーもう。ホントにうっせえな、こいつは。

ん？ 話が急過ぎてさっぱりついてけないって？

まあ待て。いいから待て。

今俺達が何をしているのかを語るには、昨晚の出来事を語らなきゃならねえ。

『ゆーま。遊園地ってどこにあるの？』

ゴールデンウィーク二日目の夜。俺の部屋でテレビ見てたゆまが、突然こんな事を言い出した。

ちようどテレビで特番をやってたんだ。ヘヴンズランドっていう遊園地が、また新しいアトラクションを作ったんだと。

このヘヴンズランド、何でだかはおく分らないんだが、毎年毎年新しいアトラクションが作られてんだよ。そんなスペインでアトラクション作る遊園地なんざ他にないから、皆もの珍しくてこの時期は大抵メチャクチャ混みやがる。俺が生まれた頃にはもうあったはずだから、結構長いよな。

でもって、ゆまがこんな事を言い始めたのは、今年新しく作られたアトラクション【エンゼルフォール】のレポートが終わった所だった。真っ暗なコースを後ろ向きで、しかも凄まじいスピードで滑走する新感覚のジェットコースターなんだそう。すっげえ怖そう

な感じが逆にウケていて、このゴールデンウィークも長蛇の列が後を絶えないんだとか。

……子供でも分かるよな。この後の展開が。

念の為、当たり障りのないように返してみる。

「そりゃ色んなトコにあるな。けど、そんなすぐに行けるトコにやねえぞ」

『ゆま、行ってみたい！』

……反抗、散る。

俺の対応がどうであれ、お前の言う台詞は初めから決まってる、間違いない。

「はあ……そう来ると思ったよ……一応、行けねえ事はねえぞ」

『ホントに！？』

「嘘ついてどうすんだ」

『どこに行けるの？』

「そこだよ、そこ」

言いながらテレビを指差す。

言わずもがな、行ける所ってのはヘヴンズランドに他ならない。

実は電車で三十分とかならなかつたりする。すぐに行けるトコにはないなんてのは真っ赤な嘘だ。

『ここ！？　ここって、もしかしてこれにも乗れるの！？　これ！？』

「そうだってんだろ」

どんだけテンション上がってんだよ。今時小学生でも遊園地くらいでそこまでテンション上がんねえぞ。

『それは上がるよ！　だって後ろ向きだよ！？　真っ暗なんだよ！？』

「意味が分かんねえよ。つつか、普通に話してる時に人の心を読むんじゃねえー！」

『読もうと思って読んでるんじゃないもん。勝手に聞こえるんだからゆまにもどうしようもない』

ちきしょう……おちおち考え事も出来やしねえ。

『けど、ようし！ それなら明日行こー！』

「はあ！？ どんだけ急なんだ！？ 何で明日なんだ！？」

『だって。ゆうま今日一日何もしなかったじゃない』

そりゃあ何かする気もなかったからな。日がな一日のんびりまったりしてましたよ。

「それがどうしたんだよ」

『そんなんじゃ身体にも悪いよ。思いつ切り遊んで思いつ切り発散しよー！』

これ以上何を発散せえと仰るのか、ゆうまさんや。

……ああ。お前のせいで溜まってるストレスか。

『ゆうまのせいじゃないもん』

「だから読むなっつーところが！」

「たたく……あんまし好き勝手言っつと連れてかねえぞ、へウンスランド。」

『ゆうまのせいでいいです』

「そこまでして行きてえのか！？」

『うん、行きたい』

ああそうかよ……。

正直、面倒くさいって言葉が俺の内面を完全に支配しようとしてるんだが。

『行きたい行きたい行きたい行きたい行きたい行きたいーッ！』

「うつせえ！ ガキみてえに騒ぐんじゃねえ！」

『ゆうま、今だけ子供だもん！ 行きたい行きたい行きたい行きたい行きたい』

「だああもう分かった！ 分かったから騒ぐな！ 俺の頭がひび割れるうう……ッ！」

というそんなこんなので、俺は起きたくもない朝五時なんて時間に叩き起され、このヘヴンズランドにやって来た訳だ。

くそ……ゆまの声が頭に聴こえるっての、俺にとつては脅迫以外の何物でもないぜ……。

でもって、来て早々にもかくにもこれに乗りたいたいんだと口やかましいゆまに連れられるように、俺は【エンゼルフォール】の列に並んでる。

後ろを見してみる。

やー……なつげえー。一体何百人並んでんだろうな、これ。もう並び始めてからそろそろ二時間は経とうとしてんぞ。

はあ、やれやれ。ここまでゆまの言う事聞いてやるなんて、俺ってば優しいいつたらありやしねえな。

「ん？ ゆーま、何か言った？」
何も言ってねえ。

「そう？」

決して嘘じゃない。間違いなく、俺は何も口に出してない。

こんな人が大勢いるトコで、一人ブツブツ言ってる奴がいたら、そりゃ単なる変な奴でしかねえだろ。

……しっかし。

改めて辺りを見回す。

右を見ても人。左を見ても人。前も、後ろも、どこを眺めても人、人。

流星はゴールデンウィークだ。連休ともなると、皆こういうトコに遊びに来るもんなんだなあ。

……もしかしなくても、一人で来てる俺ってメチャクチャ浮いてね？

「一人じゃないよ、ゆまがいるじゃん」

この場合、お前はカウントされねえの。

『何でー？』

周りから見たらお前は見えねえだろ。俺とお前にとっちゃ二人でも、周りから見たら一人なの。

『まーまー。何でもいいじゃない、ゆま達が楽しければ』
そりゃそうかもしんねえけど。

まあいいか。知ってる奴に出逢わない事だけを祈るところ。

『あ、そろそろゆまの番だよ！』

お前の、じゃなくて俺達の、だけだな。つつか並んでんのは俺だから、正確には俺の、だ。

『まだこだわるの？ そんなのどうでもいいじゃんってばー』

うつせえよ。お前はフヨフヨ浮いてるだけだろが。地に足つけてずーっと立ちっ放しの俺の身にもなれ。

『ゆーま、足痛いの？』

一時間くらい前からずつとな。

『何で座らないの？』

この列に並んでっからだろうが！？ 誰のせいで並ぶ羽目になっ
たと思っでんだ！？

『電車で寝過ぎしたゆーまのせい』

……左様でございましたねお嬢様。

そう。何を隠そう、ここへ来る途中の電車の中で、俺は見事に三十分近く寝過ぎしていた。そのせいで開園ラッシュに間に合わず、長蛇の列に並ぶ羽目になったんだ。

あーそうでしたよ。どーせ俺のせいですよ。俺の足が痛えのも、地球が丸いのも、世界から戦争がなくならねえのもみーんな俺が悪
いんじゃないしょうめ。

『まーたそうやってすぐイジけるー』

「お次のお客様方どうぞー」

『あ、ゆま達の番、次だよ！ 行こー！』

へいへい。

「何名様ですかー？」

「……一人っす」

「一名様ですかー。それでは、一番前のお席へどうぞー」

一番前ね。えーっと。一番前、一番前ー……っど。

っておい!? 一番前って一人席かよ!?

「パパー。あのお兄ちゃん、何で一人で座ってるのー?」

「こら、指差したりしちやいけません」

……耐える。これは試練なんだ。耐えないと先はねえんだぞ、神名悠馬。

スタッフに促されるまま、安全バーを下げる。

『ワクワク! 楽しみー!』

おいこら。何でデメエは人の足に腰かけてやがる。

『だって、ゆまも乗りたいもん』

あーそーっすか。

はあ……他の奴に見えなくて本当に良かった……。

「まもなく発射致しまーす!」

おおう。もう発射すんのかよ。

あれ。何か忘れてるような。

キイイイと甲高い音が響いていく。

あ。そういえば。

「それでは皆様、いつてらっしやーい!」

ゆまっつて何にも触れなかつたんじやのわあああああッ!??

し……死ぬかと思っただ……。

『ぶー……全然楽しくなかったー……』

そりゃそうだろ。よくよく考えたらお前、何にも触れねえって事は乗り物乗れねえんじやねえか。

ホント焦った。マジでどうしようかと思った。

急激な加速度で一気にスピードが上がる中、ゆまだけがポツンと一人取り残されてるし。

例の俺とゆまが離れられない現象のせいで、俺とゆまの身体がそれぞれ引っ張り合うし。

おかげで安全バーが肩にメツチャ食い込むわ、後ろ向きでウネウネ回って死ぬ程怖えわ。何回横に回転しやがったんだ、あれ……。

やー……本気で怖かった。ありや確かにスリルだ。絶叫マシン好きにはたまらねえだろ。まだ心臓がバクバク言っつてやがる。

『むー！ つまんないつまんないつまんないー！』

んな事言っつてな……じゃあお化け屋敷にでも行くか？ あそこなら乗り物はねえぞ。

『絶対に嫌』

即答だな、おい。何でだよ。

『お化け怖いもん』

お前も似たようなもんだろ、と思う俺は間違ってるのか？

『ゆま、お化けじゃないもん。怖くないから違うんだよ』

どついう理屈だよ、それ……。

他に乗り物じゃなくて楽しめそうな何か……ねえ。

何かねえかな。何かあるような気がする。

んー……。

あ、そだ。あれがあんじちゃん。

『ん？ あれって？』

いいからついて来い。行くぞ。

『はい』

能天気な返事と共に俺についてくるゆま。

……何だろうな。何か犬か何かを連れてるような気分になってきたんだが。

『……ねえ、ゆーま？』

な、何かなー、ゆまさん。俺は決して君の事を犬だと言ってる訳

じゃあな

『ゆーまってさ、彼女とかいるの?』

……は?

別にいねえけど……何で?

『じゃあさ。今までにいた事は?』

ねえよ。悪かったな。

『ふうーん……じゃあ、デートとかもした事ないんだ?』

なきや悪いかちくしょう。

つつか、お前はあんのかよ?

『分かんない。覚えてないもん』

……ちつ。何かズルくねえか、それ。

『そんな事言ったって仕方ないじゃーん』

あーそうっすね。仕方ないっすね。

『……くふふ。でもそっか。デートした事ないのかあ』

何だよ。そんな話引つ張るんじゃねえよ。

『いやいやいや……にゃはは。何か照れちゃうにゃー』

何でお前が照れんだよ。お前全く関係ねえだろうが。

『べー。教えてあげないよッ!』

……何なんだ、おい。

お、着いた着いた。ここだ。

『ここ、なあに?』

入ってみりゃ分かるよ。んじゃ行くぞ。

『ほーい』

『いらっしやいませー。水鏡の迷宮、ミラーラボリンス【トワイライトミラージュ】

へようこそ!』

『一人なんですけど』

『はい、大丈夫ですよ。それでは、出口目指して頑張ってくださいね

!』

はいはいと。

ふう。何か少し慣れてきたな、一人ですって言うの。

『ホントは二人なんだけどねー』

しょうがねえだろ。ちゃんと二人に見える時に来たら二人って言うおうな。

『え……それって……』

あん？ どうしたよ？

『い、いや……何でもないよ』

そうか。んなら入るぞ。

入口をくぐって建物の中に入る。

洞窟のような通路を抜けた先には

『ふわあ……』

いつもギャアギャアとやかましいゆまが、思わず言葉を失っている。

無理もねえ。俺も、初めて来た時は確かそんな感じだったと思う。

四方八方を鏡で囲まれた大迷宮。それがここ、【トワイライトミラージユ】だ。

本来はただ通り抜けるだけの通路だけな訳なんだが……周りを鏡に囲まれるだけでこんなにも印象が変わる。

とにかく綺麗で……不思議なんだ。自分の映った合わせ鏡が、無限に広がっていくような感覚。

どこまでも。本当にどこまでも繋がっている。どこまでも行ける。そんな気になる空間。

流石にゆまの姿は映し出されないけど……それでも、ここなら少しは楽しめるだろ。

それに……ここなら俺が独り言喋ってても、誰も気付きやしないだろ。

「どうだよ、ゆま。ジェットコースターなんかよりは楽しいか？」

『うん！』

「そうか。そりゃ良かった」

うん、か。どうやら本当に楽しめてるみたいだな。

ゆまは、しばらくの間合わせ鏡の世界を食い入るように眺め……

それから、口を開いた。

『……ゆーま』

「ん？ 何だ？」

『今日は、連れて来てくれてありがとうね』

満面の笑顔で、ゆまは言った。

自分は心から楽しんでいる。言葉などなくても、ありがとうと伝えて来ているような そんな微笑みだった。

その表情を見て……俺は何故か、妙な感覚を覚えた。

こんな経験が前にもあったような……そんな、既視感デジャヴに近い感覚。そんな事がある訳がない。生まれてこの方十六年間、彼女なんていた事もない俺が、こんな風に女子に優しく微笑まれて感謝されるなんて経験があるはずがない。

気のせいだ……この時は、そう思った。

「何だよ改まって。連れて来なかったら来なかったでギャアギャアと喚き散らしてやがるくせに」

『うん、そうかも。でも、ありがとう』

「へいへい」

まあ。何にせよ、楽しんで貰えたなら何よりだ。

しばらく鏡の迷宮を堪能した後、俺達は帰路についた。

第五話：思い出とキーホルダー

「……ふわぁーあ……んっ」

腕を組んで、大きく伸び上がる。

『面白かったねー!』

そうだな。確かに、思ってた以上に面白くて驚いたぜ。

遊園地の一件から四日。ゴールデンウィークもとうとう最終日。

今日はゆまと映画館に来ていた。

何せ、明日からは学校が始まる。この一週間みたいに、ずっとゆまに時間を割いてやれる訳じゃない。

……ま。割きたくて割いた訳でもないんだけどな。割かざるを得なかった、って言い方の方が正しいのかもしれない。

『特にあのシーンが最高だった！ 主人公とヒロインが寄り添って抱き合って……』

んなトコよりも、俺は断・然！ あのバトルシーンだね！

ブツかり合い、掻き鳴らされる剣と剣！ 飛び散る火花！ 流れ

るような動きと荒々しい雄叫び！ かぁーッ！ 燃えるうッ！

『でもでも、あの主人公のお父さん……カッコよかった！ あれぞ漢の生き様、って感じ!』

そうそう！ 聞いたかよ、あの台詞！ 【俺がお前にしてやれる

事など何一つない。だからせめて、お前の俺に対する恨みくらいは受け入れよう】……そうそう言えねえぜあんな事！ かつけえつたらありやしねえ！

『ホント面白かった！ 連れて来てくれてありがとね、ゆーま!』

お、おう。

……またか。またこの感じだ。

遊園地に行つてからの四日間。俺達は色々な所へ遊びに行った。

ゴールデンウィークなんてどうせどこも混んでるし、家にでもいいやと始まる前には思ってたのに、こんなに遊びに行く事にな

るとは驚きだ。

そして。

どこかへ行く度に、ゆまは満面の笑みでありがとうと言ってきた。その度に、俺は妙な感覚に見舞われ続けていた。

……遊園地の時にも感じた、あの既視感^{デジャヴ}。

前にも同じような事があった……そんな気がして仕方がない。

ここまで気になるって事は、何かがあったんだ。それも、記憶が曖昧になる程の昔に。

何だ。何があった。俺は何を忘れてるんだ。

『……うま。ゆーま！』

ん？ どうした、ゆま。

『どうしたじゃないよ。忘れてるとか忘れてないとか、ボーッと考えちゃってさ』

ああ……悪い悪い。

『まったくもう……まあいつか。じゃあその代わり、また明日ね！明日も楽しい所に連れてってね！』

バカ言ってるんじゃないよ。明日は学校だって何度言や分かるんだん？

何だ？ 何かまた妙な引っ掛かりが。

今日は連れて来てくれてありがとう！ じゃあ、また明日ね！

……。

……あ。

『ゆーま？』

そうか……あいつだ。あいつに言われた事があったんだ。

頭の中でゆまの言葉が繋がった時、ようやく……分かった。

『思い出した？ 何を？』

そうか。俺は頭の中で、この思い出と繋げまいとしてたんだ。だから……思い出さなかったのか。

『思い出？』

「……沙紀」

思わず、その名を口にす。

次の瞬間。

それまで思い出そうとしなかった思い出が溢れ出してきた。

『誰？ 誰の事？』

ゆまがキョトンとした表情で俺の顔を覗き込んでくる。

「……この話は、わざわざするような話じゃないか。何でもないよ、ゆま。」

『えー！？ 何かそういうのやだ！ 教えてよ！』

何で食い下がって来るんだよ。別に面白い話でもないって。

『やだ！ やだ！ 聞きたい聞きたい！ 一回気になっちゃったから聞かないと満足しない！』

あーもうホントに面倒くさいなちきしょう。

分かった。分かったよ。話せばいいんだろ、話せば。

『やった』

「……念押ししとくが、本当に面白い話じゃないからな。」

『分かってるって』

ホントに分かってんのかね……。

まあいいか。俺が、五歳の頃の話だよ。

俺には、凄く仲のいい幼馴染がいたんだ。

『ふんふん、それでそれで？』

名前は新田沙紀（にじたさき）。俺ん家のすぐ近くに住んだ。

俺達は本当に仲が良くて……どこへ行くにも、何をするにも、ずっと一緒だった。

『……どんな子だったの？』

可愛い子だったよ。一緒にいると、周りから羨ましがられるくらい。い。

明るくて、ひょうきんで……とても楽しい子だった。

「……ちよつと、ゆまに似てる。」

『そつ……なんだ』

それが……ある日。交通事故に遭った。

『交通……事故……』

その日、俺達は学校から帰ろうとしてた。

そしたら……途中で俺がハンカチを落としてな。

『拾おうとしたんだ……その子が』

ああ。

で……そこに車が突っ込んで来た。後で聞いた話じゃ居眠り運転だったって。

『それで……事故に遭ったんだ……その子』

そう。その子と……俺が。

『ゆーまも!? ゆーまも事故に遭ったの!?!』

二人して救急車で運ばれて……けど……。

『……ゆーま?』

けど……助かったのは……俺一人だった。

沙紀は……俺よりも酷い状態で……そのまま……死んじまった。

『ゆーま……』

……な。全然面白くない話だろ?

『そ、それは……』

けど……はあ……。

『……ゆーま、大丈夫? 何だか落ち込んでるみたい……』

この話を思い出すとどうもな……。

沙紀が死んだのは、俺のせいなんじゃないかって……今でも思うんだ……。

『ゆーまの……せい……?』

だってそうだろ。

俺が落としたハンカチを自分で拾ってりゃ……沙紀は助かったのかもしれない。

いや、それ以前に俺がハンカチなんて落とさなけりゃ……。

『そんな事言っちゃダメ!』

……ゆーま?

『起こった事は変えられない……だけど、自分が死んでれば良かった』

たなんて言っちゃダメ！ そんなの……悲し過ぎるから……」

けどよ！ 俺のせいで人が一人死んでるんだぞ！？

それからだ……人と深く関わるのが怖くなって……適当に距離を取るようになった。

ダメなんだよ。関わった奴がいなくなるのが怖い。誰かを失うのが本当に怖い。

だから……一人でいる事を選んだ。

『違う……違うッ！』

何が違うんだ。何も違うない。

俺は一人でいい。一人がいい。一人なら……誰かを失う事もないから。

『違うもん！ ゆーまは一人なんかじゃないよ！』

何言ってるんだよ……どう見たって一人だろ。

『違う！ そんなはずない！』

ゆま……？

『だって、ゆまがいるもん！』

……あ……。

『ゆーまがいるから、ゆまは一人じゃない。だから、ゆまがいれば、ゆーまも一人じゃない！ そうでしょ！？ 違う！？』

そういえば……そんな事言ってたっけか、ゆまの奴。

確か、ゴールデンウィークの初日だ。誰にも気付かれなくて一人で、寂しくないかって俺が聞いたんだっただっけ。

『ゆまがいるよ。ゆーまの傍に、ずっといるよ。だから、ゆーまは一人じゃないんだよ』

ゆまは、俺の顔を覗き込みながら言う。

こいつ……俺を慰めてんのか。こんな俺を……。

『だから……ね？ 一人だなんて、そんな寂しい事言わないで』

……そうか。

そっだよな。この一週間、俺一人じゃこんなにあちこち行かなかった。

俺一人じゃ、こんなに日々を楽しんでなかったろうしな。

ゆま。確かにお前の言う通りだよ。

『分かってくれた？』

ああ。分かった。分かったよ。

確かに俺は一人じゃない。少なくとも、俺の傍にはゆまがいる。

やかましくて面倒くさい奴だが……確かに思うよ。

こいつといると、心から笑えるって。

……だから。

『だから？』

頼むから、顔をもう少し離せ。

……俺の顔に近過ぎて恥ずかしい。

『あつはは！ ゆーま顔真っ赤！』

うるせえっつーんだ。

『ねえゆーま、何してるの？』

「あん？ 何って、学校行く準備だけど？」

それ以外の何に見えるんだ、お前。

『学校？』

「ああ。ゴールデンウィークも今日で終わりだからな。明日からまた学校だよ」

つつつても、今週の学校は明日だけな訳なんだけどな。

一日だけ行ってまた土日になるなら、休みにしてくれたっていいと思うんだけどなあ。

『学校かあ……ゆーまのクラスメイトってどんな人がいるの？』

「ん？ そうだなあ……とりあえず孝明はいるだろ」

『孝明って、こないだの人だよ？』

「そーそ」

後はー……やたらやかましくてウザい奴もいるな。

『へえ。仲いいの?』

「そんな事ない……って言いたい所だけど、何故かトリオとして認識されてんだよな」

『へえー！ 楽しみだな、会っの!』

そんなに楽しみにするような事でもねえけどな。

けど、そっか。ゆまと一緒に学校に行くのって初めてだ。

授業中でも平気で話しかけてくるんだろー……こいつ。話しかけられても表立って反応しないようにしねえと。

えーと。教科書は持った。ノートも入れた。あ、ヤベ。筆記具出しっ放しだ。

『あれ? ゆーま、それ何?』

「へ?」

あれこれと鞆に物を詰めている所で、不意にゆまが声を上げた。

「何の事だ?」

『それぞれ。その鞆についてる奴』

「ん? ああ、もしかしてこれの事か?」

『そうそう』

ゆまの視線から、話題の対象が鞆についたキーホルダーの事だと分かる。天使の翼の形をした、少し大きめのキーホルダーだ。

『そんなのつけてるなんて、珍しいじゃない?』

「そうか?」

『ゆーま、そういうのつけそうにないもん』

あーそうですか。色気ついてなくてすみませんね。

「確か誰かから貰ったんだよ。ただ俺、鍵なんて家の鍵くらいしか持ってねーから、別にキーホルダーなんていらねえし。だから鞆につけてんだ」

『へえ……でもさ。何でそれ、片方しかないの?』

そう聞かれた時、俺は正直驚いた。

確かに、鞆についているキーホルダーは片翼分しかない。そして、これは本来双翼のキーホルダーだった。

けど、何でそれをゆまが知っているんだろう。

……まあいいか。どうせ聞いても理解出来る答えじゃねえだろうし。

「や、実はな。一週間半くらい前に、落としちまったらしくて」

『落としした？』

「ああ。学校からの帰り道にな」

学校を出る時にはあったのを覚えてるから、歩いて帰って来るまでのどこかだとは思ってたんだが。

まあでも所詮貰い物だし、なくても困るもんじゃねえから放つといたんだよ。

『ふうん……』

「どうした？ それが気に入ったのか？」

『ううん……ただ何となく気になっただけ』

「そか。ふ……あーあ。俺はそろそろ寝るぞ。電気、消すからな」

『はい』

布団を被りながら、脇にいるゆまの姿を見る。

はてさて。明日はクラスの奴等をこいつにどう紹介しよう。

どうせならインパクトのある紹介をしてやりてえよな。

へへ。こいつがどんな感想を持つのか、ちよっと楽しみだぜ。

さあ寝よう寝よう。今日は気持ちよく寝られそうだ。

そして、翌日。

小鳥の囀りが聴こえてくる頃、俺は目を覚ました。

いつもより早く目え覚めたな……そんだけウキウキしてるって事

か。アホかね俺は。遠足行く前の小学生じゃあるまいし。

やれやれ。そろそろ起きて風呂でも入ろうかね。

んじゃ、まずはゆまを起こしてっと。

そこで、初めて気付く。

「……あれ？」

一週間ずっと同じ所で寝ていたゆまの姿が なかったんだ。

第陸話：時、既に遅く

「おはよー！」

「はよーっす」

元気と気怠さの混ざった声を上げながら、次々と見知った顔が現れる。

それを見ながら……俺は、別の事で頭が一杯だった。

ゴールデンウィークも終わり、もう三日が過ぎようとしていた。

あの朝、何の前触れもなく突如としていなくなっただゆまは、それから一度として俺の前に姿を現していなかった。

正直に思っただけを言えば　一体何がどうなったのか、今でも理解し切れていなかった。

あまりにも突然の別れ。

こんな事になるなんて、少なくとも俺は予想してなかった。何せ、ゆまがどういう存在だったのかすら分かってなかったんだ。

そりゃあ俺だってもうガキじゃない。出逢っても、いつかは別れが来る事くらい分かってたさ。それがどんな形で訪れるにせよ、永遠に一緒にいられるだなんて思っっちゃいない。

……けど。けど。だ。

いくら何でも、これは唐突過ぎやしねえか。

一体何があっただんだ？　一体何が起こったんだ？　一体何で、ゆまは消えたんだ？

無数の疑問が頭の中に浮かぶ。浮かんでは　答えも出ないままに放置されていく。

そんな状態が、もう三日間も続いていたんだ。

間に土日があっただから、思い浮かぶ場所を回ってはみた。この一週間近くでゆまと一緒に行った場所。

ゲーセンも。ボーリング場も。遊園地も。カラオケも。映画館も。そのどこにも……ゆまはいなかった。

考えてみれば当たり前だろう。ゆまは、俺から離れる事が出来なかつたはずなんだ。

だからこそ始まった生活だった。それがなければ、今頃こんな気持ちになつたりするもんか。

という事は やっぱり、ゆまは消えたんだ。

それが何故なのかは分からない。消えたゆまがどうなつたのかも分からない。

何一つ、俺は知る事が出来ない。

くそ……ッ！

心の中で悪態をつく。

こんな時は、ゆまがそれにいちいち反応するはずなのに。

どーしたのゆーま、とかつて呑気な声で聞いてくるはずなのに。

どこに行きやがったんだよ……ゆま。

「よー悠馬！ 朝っぱらからしけたツラしてんなあ、おい！」

「おはよう、悠馬」

そんな事を考えていたら、不意に話しかけられ、振り向く。

「……何だ、孝明か……」

「どうかしたのか？ 何やら複雑そうな顔をしていたが」

複雑そうな顔って何だよ。失礼な。

けど……そんなに顔に出てるのか、俺。

「ちよっと待て！ ちよーっと待てよ、お前等！」

「どうした？」

「どーしたじゃねーよ！ 誰か大切な人を忘れちゃいませんかつたんだ！」

「……忘れてない。俺と孝明がいれば十分だ。お前はいらねえ」

「随分と酷い事を平然と言いやがりますね！？ っちゅーか話しかけたの俺！ 俺だから！」

はあ………つたく。ウザいつたらありゃしない。

このやたらやかましくてウザい奴は、吉野清耶よしのひよ。まあ、俺のクラスメートだ。

こいつ。痩せてて小さくて眼鏡かけてて……こんなにひ弱そうな外見なのに、態度だけはやたらデカいんだよな。舌禍が服を着てるって程じゃないんだが、とにかくテンションが高くてウザい事この上ない。

「んで、どうしたんだよ？ なーんかテンションMAXで低いじゃん」

「お前みたいに朝っぱらからテンションが臨界点を突破する奴はそうそういねえよ」

「なっははははーッ！ そんなに褒めんない！ 照れるじゃんか！ 意味が分かんねえ。何で照れるんだ。」

「っていつか褒めてもいいねえ。」

「……くそ。いつもはこんなにストレスを感じたりもしねえのに……今日に限っては心からウゼえぞ……」

「けどよー。お前がそんなにテンション低いと張り合いつてもんがねーんだよ」

「張り合わなくていい。そんな事なくていいからあっちに行ってくれ」

「んな冷たい事言つなよー、ホントに俺がいなくなったら寂しいだろ？ な？ な？」

「寂しくない。お前なんかがいなくなっても……」

「そこで、言葉に詰まる。」

「……はり？ 悠馬？ 悠馬さん？ 何でそこで黙っちゃう訳？」

「いなくなっても、寂しくなんかなるもんか。そう、繋げようと思っただ。」

「けど、言えなかった。」

「少し前。ゴールデンウィークの初め。ゆまと出逢ったばかりの頃は、ゆまに対しても同じ事を思っていた。」

「いつか別れる事になる。けど寂しくなんかないさ。元々こいつはいなかった奴なんだから。それが元に戻るだけなんだから、って。」

「……違った。」

「あいつがいなくなつた事で、俺はこんなに動揺してる。」

「喧嘩した訳でもない。あいつが消える瞬間に立ち会つた訳でもない。ただ……あいつがポツカリと消えちまつただけなのに。」

「元に戻つただけのはずなのに。」

「こんなにも……胸が痛い。」

「……何だよ。何だよ！ 悠馬さんがつまんねーぞ、おい！ お前、まさか彼女でも出来たんじゃねーだろーな！？」

「清耶の言葉に、ハツとする。」

「あいつが……彼女？」

「そんな訳ない。あんな面倒な奴、彼女になんか出来る訳 ない。」

「……でも。」

「少なくとも俺は……あいつといえる時、楽しかつたんだと思う。」

「たかが十六年、されど十六年の人生の中でこんなに笑つた事あつたつてつてくらい笑つたし、俺つてこんなにテンション上がるんだつて自分で驚くくらいテンションが上がつた。」

「俺は……あいつの事……。」

「「おいおいおいおい！？」 この反応はマジだぞ！？」

「清耶、よせ」

「「けどあれだろお前！ そんなへこんでるつて事は、彼女に振られでもしたんだろー？ 分かる分かる。女つて意外と見る目ねーんだよな」

「……黙れ。」

「「女なんてよー。結局頭にあんのは金とか顔とかばっかだよー。そんなトコよりもつと男の心つてのを見ろつてんだよな」

「黙れ。」

「「つつか悠馬、お前いつの間に彼女なんか作りやがつたんだよ。黙つてるなんて水臭えぞ。大体お前、彼女の事で悩むなんていーすねー！ 羨ましいぞこのヤロー！」

「「うるつせえッー！」」

ダンツ、という鈍い音が響き渡った。

俺が 机を叩き鳴らした音だ。

「……………」
辺りに緊張が走り、場が凍り付く。

その静寂を破ったのは 清耶だった。

「は……はは……な、何だよ悠馬。んーなに怒るよーな事じゃねーだ
だ」

「うるさい！ うるさいんだよ！ 何で放つといてくれねえんだ！
？」

それを遮るように俺は叫んだ。

「何も知らねえくせに！ 何も分かってねえくせに！ 好き勝手な
事がタガ言いやがって！」

耐えられなかった。耐え切れなかった。

状況を把握して、自分のわだかまりを我慢して耐えられる程……

俺は大人じゃなかったんだ。

一度口をついて出たわだかまりは まるで泉から水が溢れるよ
うに 止まってくれない。

「何が羨ましいだ！ お前に何が分かる！？ 何が分かるんだよ、
え！？ 言ってみるよ！」

「ち、ちよつと待てよ、俺は……………」

清耶が、叫び出した俺にビビッているのが分かった。

分かったけど……その時の俺は、それで自分を抑えられる程……
理性的じゃなかったんだらうな。

待つ事もなく、続ける。

「お前が何を知ってるんだ！？ 俺の何を知ってたんだよ！？ お前
に俺の何か一つでも分かる訳」

「そこまですておけ」

そこで、清耶の前に一つの人影が現れた。

人影は、俺を制するように掌を突き出して立っていた。

「孝明……………」

「そこまでにしておけ、悠馬」

思わず目を見開く。身体が、自然と一步後ろへ下がった。

孝明の雰囲気……いつもとはまるで違ったんだ。

何て言うのが正しいんだろう。獲物を狩る……ってのとはちょっと違う。こちらを射抜くような瞳、つてのが一番合ってるか。

そんな瞳で、孝明は真っ直ぐにこつちを見ていた。

「ふざけんなよ！　ここまで言われて退き下がれっかよ！　おいこ

ら悠馬！　お前いくら何でも調子に乗り過　」

「俺は、やめると言っているんだ」

ズン……と空気が重くなったのを感じた。プレッシャー、という奴だろっか。

孝明が、喚き立てる清耶を遮った。

「う……」

その瞳に射抜かれ、清耶は何も言えなくなる。

俺と清耶の二人が黙ったのを確認して、孝明は俺に向き直った。

「ふう……さて、悠馬」

「……何だよ」

「先刻の清耶の発言は、正直筆舌に尽くしがたい……が、あまりにもお前らしくない対応をしたものだな」

「……放つとけよ」

これは、俺の本音だった。

放つといて欲しい。少なくとも、自分の気持ちに整理がつくまでは。

出来れば今すぐにでも放つて欲しい所だったが……生憎、孝明の瞳がそれを許してはくれなかった。

「それは出来ん」

「……俺は放つといて欲しいんだ」

「俺はお前が心配だ。だから放つてはおけん……それに、気にかか
る事をお前が言った」

俺が？　何を？　何を言った？

孝明は、続ける。

「お前は、俺達は何も知らないと言った。何を知ってる訳でもないのに、好き勝手な事を言うなど。だが、それは当たり前前の話ではないのか？」

「……どういう意味だ」

「俺達がお前の事を知っている訳がないという意味だ」
説明になってねえ。俺はそう言おうとした。

が。孝明はそれをさせようとしなない。

「悠馬。人なんて存在は、所詮言葉で語らねば何も伝えられない生き物だ。武術の世界では言葉ではなく拳で語るなどという言もあるが……誰もがそれを出来ない事くらい、理解している」

俺には、孝明が何を言わんとしているのかが分からなかった。

だから何なんだ、という疑問が俺の頭をよぎる。

「お前に何があつたのかは知らん。全てを分かかってやれるとも思っていないし……分かるうとも思わない。何故なら」

「何故なら？」

「何故なら、お前が何も語ろうとしないからだ」

瞬間、理解する。

確かに俺は、孝明にも清耶にも、何も話していない。当然だ。あまりにも現実離れた話だし、俺自身信じられない事がたくさんある。

だから、二人ともゆまの事は知らない。ゴールデンウィークが明けたら、突然落ち込んでいる俺がここにいた。それだけしか、こいつ等は知らないんだ。

心の声が、聴こえる訳じゃないから。

ああ。そうか。そうだったんだ。

「悠馬？」

「お、おい！ どこ行くんだよ悠馬！」

気付いた時には、俺は走り出していた。

廊下に出て階段を下り、昇降口から跳び出した。

外は、大雨が降っていた。

靴も履き替えてなかったが、そんな事は気にもしなかった。
振り返る事もなく、ひたすら走る。

「……はぁ……はぁ……ッ！」

自分の荒い息遣いが聞こえる。

普段運動なんかしないせいだ。ほんの少ししか走っていないのに、もう息が切れている。心臓はバクバクと大きな音で鼓動を続け、足に痺れるような感覚を覚えた。

それでも、俺は走った。

それから十分も走ったろうか。

俺は、近くの川辺に立っていた。

大雨のせいか川の水位が上がっていて、今にも溢れてきそうだな。
そんな川の岸辺に、俺はいた。

「……はぁ……はぁ……ッ！」

上がった息を落ち着かせもせずに……俺は、空を見上げていた。
雨雲だらけの空。晴れていれば明るい太陽と真っ青な空が広がっているはずのそこ。

……今の俺の心情を表しているかのような、真っ暗な空。

「……お前は……どういう気持ちだったんだよ……」

誰かがいるはずもないそこへ、言葉を紡ぐ。

孝明の一言で気が付いた。自分の、心の奥底にある気持ちに。

孝明も清耶も、俺の事を本当の意味では知らない。

俺が、今まで何も語ってこなかったから。

心のどこかで、俺が深く関わる事を恐れていたから。

俺の心の声を……聴ける訳じゃなかったから。

「お前は……どんな風に感じてたんだよ……ッ！」

俺にだけは、ゆまの姿が見えていた。

俺にだけは、ゆまの声が届いていた。

ゆまにとって俺は、この世に存在している唯一の拠り所だったんだ。

そして……それは、その逆もまた然り。

ゆまには、俺の心の声が聴こえていた。

ゆま相手には、隠し事なんて出来なかった。

だからこそ。

俺にとって、ゆまは深く関わらざるを得ない相手だった。

「お前は……俺に何も言わなかったじゃねえかよ……ッ！」

容易く俺の気持ちを分かっってしまう。

容易く俺の考えを読みとってしまう。

今考えてみれば、それは思いの垂れ流しと同じだ。一方通行の濁流。この目の前にある川の流れと何も変わらない。

大丈夫だよ

本当に、怖くなかったのかよ。

一人じゃないから

怖くない訳、ないじゃないか。

だって……ゆーまがいるから

自分がどんな存在なのかも分からなくて。

自分の名前以外、何も覚えていなくて。

誰かと一緒だから怖くないだと……そんな訳ないじゃねえかよッ！

「お前だって……俺と同じじゃねえか！」

あいつは頑張ってたんだ。たった一人で。事情を知ってる奴が……

…その存在に気付ける奴が、俺しかいない中で。

怖くて。苦しくて。逃げたくて。

それでも逃げられなくて。逃げ方さえも分からなくて。

「やっと……やっと分かった……分かったんだよ！」

ゆまのツラさが。

ゆまの苦しみが。

ゆまの痛みが。

同じなんだ。ついさっきの俺と。孝明と清耶が何も分かってくれなくて……居た堪れなかった俺と。

「どうして……いなくなっちまうんだよッ!？」

やっと分かったのに。

自分の中で、ゆまがどれだけ大きな存在になっていたかが、やっと分かったっていうのに。

「うああああああッ!！」

状況はあまりにも手遅れで。

自分が、あまりにも無力に思えて。

俺は……その場でただ泣き崩れるしかなかった。

第漆話：友との絆

「まったく……少しは大人しくして下さいよ。あなたは安静が必要な患者さんなんですよ？」

「はい……すみません」

「本当に分かってるんですか！？ 毎日毎日病室を抜け出したりして」

「あーもう。分かったよ。分かってるって。」

まあ、自分が悪いのは間違っていないので、大人しく看護師さんの言い分を聞いている……振りをしてる。

展開が突然過ぎて状況が伝わらないわな。ちゃんと説明しようか。あの日。孝明と清耶を置いて教室を飛び出した後、大雨の中川辺でびしょ濡れになりながら俺は叫び続けていた。たぶん、昼過ぎくらいまで。

……で。

気が付いたらこの病院のベッドで寝ていた。

一体何が起こったんだと思うだろ？ 俺だって思ったさ。

どうもな。聞いた話じゃ、俺はその川辺で一人ブツ倒れてたらしい。それを、近くを通りかかった人が見つけて救急車で運ばれてきた、と。

まあ簡潔に説明するなら、風邪をひいた訳だ。

……なっさけねえとか思う奴はいるか？ いるだろうな。ちなみに俺はそう思う。

個人的にはな。たかが風邪で病院なんて大袈裟なと思ったりする訳なんだけど。

どうやら、軽い細菌性肺炎かもしれないという事らしい。まったくもって自覚って奴がないんだが。

で、念の為に大事を取って一週間入院する事になったんだとか。やれやれ。人が寝てる間にいつの間にか話があればこれ進んでやが

ってまったく。

それがつい一昨日の事。要するに、もう入院して三日目って事だ。あくまでも『軽い肺炎かもしれない』程度のレベルなのであって、風邪である事に変わりはない。もう熱も大してねえし、ほんの少し身体がダルい程度だ。

詰まる所、暇なんだよ。

入院なんてした事はないが、やってみると思ってる以上に暇なものだ。基本的に寝てる事しか出来ない。やれてもせいぜい本を読んだりするくらい。

な？ 分かるだろ？ 十六歳の健全な高校生としては、この暇な時間に耐えられないんだよ。

……今は、出来る限り暇な時間って奴を作りたくねえしな。

「いいですね？ ちゃんと大人しくしてるんですよ？」

「はい」

戸が閉じられる。

俺がいるのは個室じゃない。病室には他にも人がいる。周りの人につながるさくしてごめんなさいと一通り謝り、俺はベッドに寝そべった。

はあ……せめて個室だったら、ちよつと大きな音で音楽聞いたりとかしても周りの迷惑にならないんだろうに。

目を瞑り、息を落ち着ける。

その時だった。

「悠馬」

俺の名前を呼びながら、扉を開けて入って来る人影。

その人影に、俺はあまりにも記憶があり過ぎた。

「……孝明」

「それと、こいつもいるぞ」

「……………」

「清耶もいるのか」

孝明と清耶だった。

「……どうしたんだよ？ まだ学校行ってる時間のはずだろ」

「今日は午前授業だったのな。この鞆を届けがてら、清耶を連れて見舞いに来たのだ」

「……そっすか」

孝明が差し出した鞆を受け取る。あの日、俺が学校に置きっ放しにして行った鞆だ。例のキーホルダーもついてる。間違いない。

それにしても……。

ヤバい。すっげえ気まずい。

なにしろ、二日前の教室での一件以来、こいつ等とは顔を合わせない。

あの時は頭に血が上ってたからな……何言っちゃまったっけか、俺。悠馬。今日は清耶が、お前に言いたい事があるそうだ」

「へ？」

「なッ！？ 孝明！ お前またそうやって無理矢」

「清耶」

孝明が、清耶の目をしっかりと見つめる。

おお。清耶が肩をすくめた。すげえな孝明。対清耶のリーサルウ

エポンだ、お前は。

「うー……悠馬」

「何だよ？」

おーおー、拳なんて握っちゃってまあ。一体何を言われるのやら。しばらくあーとかうーとか唸った後、清耶は意を決したように口を開いた。

「その……こないだは……ごめん！」

その突然の謝罪に 俺はポカンと口を開けるしかなかった。

清耶が、謝った？ 俺に？

……何で？

「あーその……あん時……お前が元気ないのが分かって、その……俺、お前の事元気付けてやろうと思って！ けど……お前の事怒らせちゃって……」

「清耶……?」

「そんなつもりなかったんだ！俺はただ……お前に落ち込んで欲しくなくて……けど、孝明にも言われた。気持ちは分からんでもないが、言葉は選ばなくてはならん……って。ホント……ごめん……」

清耶の言葉を聞きながら、孝明が後ろでうんうんと頷く。

……何だ。そんな事か。

「分かってるよ、そんな事」

「悠馬……?」

そう。最初から分かっている。

こいつに悪気なんかない。さらさらない。こいつは単に、いつも必死なだけ。それが空回って、無駄にテンションが高くなるだけなんだ。

よく分かっている。それが分かっているやツルんだりしない。

「あん時は……俺が一杯一杯だった。いつもなら流せるもんが流せなかった。俺の方こそ……悪かったな。ごめん」

「ゆ……悠馬……」

ちよつと泣きそうになっている清耶を眺めてから、その視線を孝明へと移す。

「孝明にも心配かけたな。ごめん」

「別に、構わん」

こんな時でさえ古めかしい奴め。

「ゆ……悠馬……」

ドサツ、と俺に抱きついてくる清耶。

「おわっ!? だ、だからって抱きついてくんない！俺はそういうのに興味はねえ！」

「やれやれ。仲が良いのか悪いのか」

孝明、そんな事言っただけで助けるこの野郎！

「……それでだ、悠馬」

「あん？ 何だよ？」

ようやくと清耶が落ち着いた所で、孝明が急に話を振ってきた。

「これで、お前の抱える問題の一つは解決した事になる訳だが」

「そうな」

「もう一つの問題は、解決したのか？」

「もう一つの問題……聞くまでもねえよな。」

「ゆまの事だ。」

「いや……まだ何にも」

「そうか……」

むう、と孝明が唸る。こいつはこいつなりに考えようとしているんだらうか。

そんな中で、清耶がなあなあと話しかけてきた。

「どうした、清耶？」

「あのよー。冷やかしかそーゆーの全部ナシでだぜ？」

「分かってるって、そんな前置きいらねえよ」

「お前の問題って……マジで女関係なのか？」

「これまた応えづらい事を……」。

こいつの言う女関係ってのは、要は恋とか愛とかってうちの事だからなあ……変な応え方したらとんでもない事になりかねない。

少し考えて、俺は応えた。

「……まあ、な」

まあ。少なくともゆまは女だし、この応え方は間違ってると思っ
う。

「ふうーん……んならよ。俺がいいアドバイスを仕入れてきたぜ！」

「アドバイス？」

仕入れてきたって何だ。お前がアドバイスしてくれる訳じゃねえ
のか。

「あのな。これは、俺のダチで彼女持ちの奴が言ってたんだけど」

「ほう」

「彼女と喧嘩した時は、お互いの為に何をするのが一番いいかを考
えるのが一番だっさ」

.....。

「どういう事だ、それ？」

「さあ。分かんね」

それが分かんねえんじや意味ねえじゃねえかよ。

「どーゆー事なんすかね、孝明センセ」

ああそうか。ここにも彼女持ちの先生がいたんじやねえか。

「さてな。俺は喧嘩などした事もないから分からん」

あーそーですか。

「..... 悠馬。俺はここはムカついていートコだよな？」

「ムカつく事は許可する。けど、それは病院を出てから一人で発散しろ」

「分かったぜ！」

たぶん分かってねえが放つところ。その内勝手に忘れるだろうし。

「まー話を戻すとだ。たぶん、相手が何をしたら喜んでくれて、自分は何をされたら嬉しいか、って事じゃねーの？」

「相手が何をしたら喜んでくれるのか、ねえ.....」

あいつが喜びそうな事か.....。

パツと思いつくものだけでやたらたくさんあるぞ、おい。

「それはつまり、相手の立場に立って物事を考えろ、という事だろ
うな」

「相手の立場に立って？」

「うむ」

よく言われるあれか？ 自分が相手の立場だったらどうするかとか、って奴か？

それなら..... 少し分かる。

俺は、あいつの事を色々知っているつもりで、結局何も知らなかった。

あいつは、一人で頑張ってた。たった一人で、恐怖と戦いながら。俺は、それをちゃんと理解してやれなかった。見てやる事が出来なかった。

そういう事、なのかな。

「……悠馬」

しばらく俺が考え込んでいると、ふと孝明が話しかけてきた。

何だ何だ。いつもは無口なくせに、今日は随分とよく喋るな、孝明の奴。

「今度は何だ？」

「今日、ここへ来たのは……清耶に謝罪をさせる為だけではないのだ」

ん？ 違うのか？

ああ、もしかして俺の事を心配したから来てくれたんだとかそういう事？

「……すまなかった。悠馬」

………はい？

「何でお前が謝るんだ？」

「俺は……偽りを語った」

へ？ ほえ？ 何？ 何だ？ 何言ってるんだ、こいつ？

偽りを語った？ 嘘ついた、って事か？

これが漫画なら頭の上に無数の『？』が飛び回っている事だろう。そのぐらい、孝明の発言は理解が出来なかった。

元より小難しい事を平気で言ってくる奴だ。こいつが言う事を全て理解なんて出来なかったし、それをおかしな事だと思っなんてのはとうに通り越していた。

が。それにしたって、今回の発言は意味が分からな過ぎる。

「どういう事だよ？」

「俺は先日言ったな。お前の事を全て分かってやれるとも思っていないし、分かるうとも思わない、と」

ああ。そういうえばそんな事言ってたな。

……改めて聞くと心にグサツとくるな、この言葉。何か切ねえぜ。

「あれは嘘だ」

「嘘？ どこが？」

確かにグサツとはくる。

グサツとはくるけど……決して的外れな意見じゃないと思った。

「確かに俺は、お前の事をよく知らん」

「……まあそりゃそうだろうな」

当たり前なんだ。知らないのは。俺が何も言ってないんだから。ゆまには俺の心の声が聴こえていた。

だから、何も言わなくても勝手に全てが伝わっていた。

けど、こいつ等は違う。

言葉で言わなくちゃ、何も伝わらない。

何も、おかしい発言ではないと思ったんだが……。

「だが……分かるうと思わないなどというのは嘘だ」

「……嘘って？」

「先日のお前を見て、俺は……何という事を言ってしまったのだと、自分を恥じた。ついてはならん嘘をついた。俺は」

孝明はそこで言葉を一旦止めた。

目を閉じて息を吐き、再び大きく息を吸い……もう一度目を開いて、こう言ったんだ。

「全てを分かる事は出来ないかもしれん。だが……分かりたいと思う」

この時の孝明は、俺の見た事のない顔をしていた。

照れていた……んだろうか。見た目にはいつも通りの仏頂面で、眉間にしわも寄ってたが……少しだけ、目の焦点が合っていないように見えた。ほんのり耳が赤かったようにも思う。

「お前が何も語らないのなら、無理に聞き出すような権利はないと感じていた。だが、もう聞かすにはいられん。可能な限りで構わない。話してくれないか。俺は、お前の苦しみを知りたい。何故なら」

一呼吸置いて、孝明は口にする。

俺の中にあつた何かを、ブチ壊す言葉を。

「俺にとって、お前は大切な友だからだ」

……この言葉が、俺にどれだけの衝撃を与えたのか。それを言葉にして表すのは、はつきり言って無理だと思う。

所詮は高校のクラスメート。そんな風に思ってた。仲はいい。けれど、その程度。そんな風に考えてた。

……こいつが、どう思ってくれてるかも知らずに。

「お、俺も！俺だってそう思ってるぞ！悠馬も孝明も、俺の大切な友達だ！」

……同じ言葉でも、清耶が言うときちょっと軽薄になる。

まあでも、嘘じゃないんだろう。単にこいつが持つてる雰囲気は軽いだけだ。

話そう。

そう思い至るのに、それ程時間はかからなかった。

「……分かった。全部、話すよ」

俺は、全てを二人に話した。

バカにされたって構いやしなれと思った。何も隠さず、全部話した。

ゆまとの出逢い。色んな所へ行つて、色んな事をした事。その時俺が思つた事も全て。

俺の過去に関する話もした。

沙紀の事。事故の事。それがあつた種々のトラウマになつていて、誰かと深く関わるのが怖くて仕方がない事も。

そして ゆまが突然消えた事。

二人は、黙つたままそれを聞いていてくれた。

あの清耶でさえ、一言も茶々を入れずに聞いていてくれた。

一通り話し終わった時 外は既に陽が落ちようとしていた。

「……なるほどな」

俺が話し終わって、最初に孝明が口を開いた。

「つまり、そのゆまという女性がどこに行ったのか。何故消えたのかが分からない、という事だな」

「そうなるな」

「ふむ……」

腕を組み、孝明は真剣に考え込む。

「うーん……どこかに行っただんならともかく、急に消えたってなるとなあ……何か痕跡が残ってる訳じゃねーだろーし……」

その隣では、清耶が頭を抱えながら悩んでいた。

「こんなはどーだ？ 例えば、お前等を繋いでた枷みたいなもんが、何かの拍子に外れたんだよ。で、ゆまちゃんはそのままフヨフヨ漂って、今もまだ迷子になってる」

「どうだと言われても、それはどうすれば解決するんだ？」

「……ですよー……」

「それよりも、ゆまという女性はやはり靈魂に近い存在で、黄泉の国へ旅立ったと考える方が自然ではないのか？」

「それ、お前の言葉をそのまま返してやるぜー」

「……それもそうだな……」

そんなこんなを言い合ってさらに十五分。

「すみません。面会時間が終わりますので、申し訳ありませんが今日は……」

と、看護師が入って来て告げる。

大した議論も出来ないまま帰らざるを得なくなった二人は、多分に申し訳なさそうな顔をした。

「すまない……悠馬」

「ごめんなあ……」

だが、俺の気持ちはいくらか楽になっていた。

「いいって。お前等に話してすぐ解決しちまうんじゃ、先週からずっと悩んでる俺がバカみてえじゃん」

これまで、ゆま以外の誰にもして来なかった話。

一人で、ずっと抱え込んで来た重荷。

それを誰かに話すというのが、こんなに楽な気持ちになれるなんて、思ってたなかった。

「……悠馬」

「ん？」

部屋を出ようとした孝明が、そこで振り返って俺を呼んだ。

「前に、お前の顔に影が見える、という話をしたな」

「……ああ」

確かに言われた。ゆまと初めて出逢った日だ。

「運命の転機を迎える……だったけ？ 確か」

「そうだ」

後悔しないよう、自身の全てをかけて選べ だったっけ。

いつ、何をかは分からなかったけど……選べなかったのかな。俺は。

ゆまが消えちまった今、そう思う。

「あの影だが……まだ、お前の顔に見えたままなんだ」

「……へ？」

「まだ、選択の時は来ていないらしい。その時を……見誤るな」

「お前は一人じゃねーんだからな。俺はバカだけど……一緒に悩むくれーの事は出来っから！」

それだけを言っつて、二人は病室から出て行った。

二人の出て行った扉を見つめながら……俺は、ゆまの言葉を思い出していた。

一人だなんて、そんな寂しい事言わないで

……ゆま。お前の言う通りだった。

俺は、どうやら一人じゃなかった。

あんな事を言ってくれる奴等が、こんなに近くにいてくれたんだ。

第捌話：そして知る真実

翌日。入院して四日目を迎えた昼。

俺は、尚もベッドの上で悩み続けていた。

考えて何が得られるのかなんて分からなかったが、それでも考えずにはいられなかった。

ゆまは、何故突然消えたんだ。

孝明が言うように、黄泉の国　あの世なんてトコに行っちゃまったって考えるのが自然なのかもしれない。

そもそも、あいつはよく分からない存在だったけど……少なくとも、人間じゃなかったのは確かだ。

俺にしか見えないし、俺にしか声が聴こえない。その時点で、一般常識で説明出来るような存在じゃない。

だとしたら、一般常識で説明出来ない所へ行つたと言われたって、何の不思議もない。

……けれど、だ。

どうしても、俺はゆまがそんな所へ行つたとは思えなかった。

だってさ。霊とかあの世とかつていうオカルトな話は俺にはよく分かんねえけど、そういうのって、霊が何かに満足して成仏するから起こるんだろ？　少なくとも、俺の乏しい知識じゃそういう事になつてる。

それなら、尚の事信じられない。

俺だって、あいつの事をよく知ってる訳じゃない。むしろ知らない事の方が多い。なにしろ、あいつ自身が自分の事を覚えてなかったくらいだ。俺に分かる訳がない。

そんな俺でも……一週間も付き合ひがある。あいつがどういう性格なのかくらいは分かつたつもりだ。

あいつは、ちょっと遊園地やら映画館やらに行つたからって、満足するような奴じゃない。

ゆまは真つ白な子供だ。記憶がないからこそ、尚更。

一つ楽しい事を見つけたら、今度はもっと楽しい事を見つければよ
とする。好奇心が旺盛で、納得して満足する事なんて考えられない
じゃあ、記憶が戻ったのか？

あいつの性格が、実は俺が知っているものとは全く違っていたと
する。何かをきっかけにして記憶が戻って、それで満足してしまっ
た？

……ダメだ。はっきり言って、想像出来ない。

この問題を解くには、あまりにも重要な情報ピースが欠けている。

それが何なのか、俺は知っていた。

それは 【ゆまとは、何なのか】だ。

いくら考えてもそれが分からない。考えようと思っても、何の取
っ掛かりもないんだ。

「……んあぁーッ！」

脚で反動をつけて起き上がり、そのまま胡坐あぐらをかく。

いきなり上げた奇声に周りの人が驚いたようだったが、全く気に
もしなかった。心の中でごめんなさいと言っておく。

何なんだ。何が分かればそれが分かるんだ。

その答えに辿り着くまでの道筋がまったくもって見えてこない。

「……くそ。気分でも変えるか……」

普段頭なんて使わないもんだから、このままじゃ知恵熱が出そう
だ。

思い立ち、俺はベッドを下りた。

昨日も勝手に出歩くなと口酸っぱく言われたばかりだ。看護師に
見つかると面倒な事になるのは分かり切ってる。

だが、人がたくさん関わるのが病院という所。一度病室の外にさ
え出てしまえば、入院着 っていうのは知らないが で歩き
まわってる奴なんてたくさんいる。その中に紛れてしまえば、そう
簡単に見つかつたりはしない。

扉に耳を当て、辺りを伺う。

……よし。誰もいない。
静かに扉を開け、俺はソロソロと病室を後にした。

俺が入院している病院は、実を言えばそこまで大きくはない。それでも、東病棟の端から西病棟の端までは結構な距離があった。俺がいた病室は東病棟の端の端。人目についてバレるのを避けようと、俺は西病棟の端まで来ていた。

ただ、な。

気分を変えようとは思ったが、結局ここは病院の中。景色なんてどこに行ってもそう大して変わらない。

しまったな。どうせ行くなら屋上にでも行けば良かった。

人はたくさん歩いているが 何も無い。東病棟とは左右が真逆なだけで、作りから何から全部同じ。入院も四日目ともなれば、まるつきり見飽きた景色な訳だ。

仕方がない。戻るか。

そう思った時だった。

その声が、俺の耳に届いたのは。

「……どうして起きてくれないの……」 ゆま」

俺は、思わず耳を疑った。幻聴じゃないかとさえ思った。

ゆま？ ゆまだって？

辺りを見回す。俺が入院してる東病棟と同じで、病室がやたら一杯ある。

どこだ。どこから聞こえたんだ、今のは。

「……どうして……あなたがこんな目に遭わなければならないの……」

……”ゆま”」

間違いない。今の声は確かに”ゆま”って言った。

声の聞こえた方へ、引き寄せられるように近付いて行く。

アルファベットの【C】の形をした建物の、頂点側の曲がり角。

その突き当たり、その部屋はあった。

「ここ……か？」

病室には、そこに入院している患者のネームプレートが貼られている。

その部屋 二一七号のネームプレートにも、マジックで名前が書かれていた。

”矢野由麻”

そんな偶然、あるはずがない。たぶん、この話を聞いた大半の奴がそんな風に思うだろう。

この時、俺の頭の中にも同じ言葉が浮かんだ。

そんな偶然、あるものか。

それでも。

どうしても、気になって。

そんな訳ないって流す事が出来なくて。

俺は、ほんの少し開いていた扉をノックした。

「……はい？」

少しして、返答がある。

最初抱いた感想は、これはゆまの声じゃない、だった。

ゆまのものとはちよつと似ているような気もしたけれど、あいつ

とは違って成熟した大人の女性の声。

それから少しして……気付く。

この声の主が、さっき”ゆま”って言っていた人じゃないか？

そんな事を考えていたせいで返答に答えずにいたからか、俺の目の前で扉が開かれる。

「……どちら様でしょう？」

俺は、目を見開いた。驚きを隠す事が出来なかった。

現れた女性は、あまりにもゆまに似ていたんだ。

無論、ゆま本人ではない。彼女より少しばかり背も高いし、何より年齢が全く違う。俺なんかよりずっと年上。たぶん、三十代後半くらい。

「あ……あの……」

驚きと緊張から、言葉が出て来なかった。あのとかそのとか、言葉にもならない事を延々と繰り返した。

それを見て、その女性はほんの少しだけ微笑む。

「もしかして、お友達？」

それが、”矢野由麻さんの”という意味だつて事はすぐに分かった。

「は、はは、はい！ えっと……その。由麻さんのお友達……です」

……考えれば考える程、情けないくらい動揺してた。

女性は、あらやっぱり、と言いながら再び微笑んだ。

「由麻の母です。由麻がいつもお世話になっていきます」

「い、いいいいいえいえそんな！ こちらこそ……お世話になります、はい」

深々と礼をされ、動揺がさらに激しくなる。

この時点では、俺は思いつ切り嘘をついていた訳だが……それすらも頭の中からフツ飛んでしまっていた。

「あら。あなたもこちらに入院しているの？」

「……あ」

そこで初めて、自分が入院着のままだつて事に気付く。

今更取り繕える訳もなかった。

「えっと。僕……俺もちょっと風邪をこじらせてしまって。この病院に入院してるんです」

「そう……それは大変ね」

「それで……この病院に、由麻……さんが入院しているのを思い出して、その……お見舞いに」

「そうなの……ありがとう」

再度、深々と頭を下げる女性。

咄嗟の機転とはいえ、嘘をついている事に少しばかり罪悪感がよぎった。

「ごめんなさい。もしかすると俺は、人違いをしているだけかもしれない。知り合いでも何でもないかもしれないんだ。」

「けれど……ごめんなさいね」

「……え？」

頭を上げた女性の顔は、深い悲しみに彩られていた。

「あの子……まだ意識が戻らないの」

憔悴しきった表情で女性は言う。

「それでもよければ……顔を見てやって」

そのまま扉は開き、中へと誘われる。

正直な所、俺は躊躇した。

人違いかもしれない。それもあつた。全く関係のない人かもしれない。でも、それ以上に。

この部屋に入る事が 怖かつた。

入ってはいけない所に足を踏み入れようとしている感覚。

知ってはいけない事を知ろうとしている感覚。

入っていいのか。このまま、足を踏み入れていいのか。

そんな疑問が、頭をよぎった。身体中が、病室に入る事を拒んだ。

「……失礼します」

それでも。

どうしても、確かめずにはいられなかつたんだ。

「どうぞ」

俺が部屋に入るのを確かめて、女性はベッドの方へと近付く。

俺は扉を閉め、その女性に続いた。

部屋の形も何もかもが東病棟と全く同じなのに、そこは明らかに東病棟とは異なっていた。

一番の違いは、個室だつた事だ。

後で知った事だが、西病棟は長期入院患者とか重い病気の人だとか、そういう患者用の病室がある場所だった。

そんな西病棟にある病室の端。開けられた窓からそよぐ風にその髪をなびかせながら。

彼女は、眠っていた。

ゆまに似た女性　お母さんを見た時以上に、俺は驚いた顔をしていただろう。

そこに横たわっていたのは……ゆまだった。

ゆまにそっくりな訳じゃない。

ゆまの面影がある訳でもない。

間違いなく、そこにはゆまがいた。

そうだよ。ゆまの名前は、ゆま！

自分の名前を、明るく言い放ったゆまの顔が思い浮かぶ。

それと比べたら、頬もこけていたし、肌も青白かったけれど……間違いなく、それはゆまだったんだ。

「由麻……お友達がお見舞いに来てくれたわよ」

由麻のお母さんが、由麻の頭を撫でながら優しく告げる。

由麻は、ピクリとも動かなかった。

眉をひそめる事もなく。口元が揺れる事もなく。

その顔は天井を見上げたまま、目が開かれる事はなかった。

由麻に反応がないのを見て……由麻のお母さんは俺に向き直り、申し訳なさそうに言う。

「ごめんなさいね。事故での外傷はそれ程大した事ないそうなのだけれど」

「……事故？」

あまりにも唐突に出て来た単語に、思わずオウム返しをしてしま

事故？　事故だった？　ゆまが？

「あら？ 学校ではもう詳しい説明をしたと聞いているけど……」
「……ごめんなさい。俺、由麻さんとは違う学校なんです」
「そうなの……」

これは嘘じゃない。ウチの学校に、矢野由麻はいない。
気になって調べてみた事があった。今現在の二年生の中に、矢野由麻という生徒はいなかった。

三年や一年にいるという可能性もなかったけど、それもな
いっていう確信に近いものがあった。

「もう二週間にもなるのね……由麻が交通事故に遭ってから」

由麻のお母さんは、沈痛な表情で呟くように口を開いた。

それを見て申し訳なさを感じながらも……俺は、話を聞き出す為
に続ける。

「……交通事故……だったんですか？」

「ええ……居眠り運転……だったそうよ」

それを聞いた途端。

不意に、胸が苦しくなった。

息苦しい訳じゃない。

ただ、胸を思い切り掴まれているような感覚を覚えた。

由麻のお母さんは続ける。

「道路に落ちていた物を拾おうとして……そこにトラックが突っ込
んで来たって……」

胸の奥で、針で刺されたような痛みを感じた。

どこかで聞いた事のあるような、話。

紛れもなく 俺がゆまにした、沙紀との別れの話だった。

強いて違いを挙げるなら、俺と沙紀の時はトラックじゃなく乗用
車だったが。

ただ、それだけの違い。それ以外の所は、寸分の狂いもない。

痛みに耐えながら、尚も聞く。

「それから……ずっと意識が？」

「そう……初めの内は、一時的な昏睡状態だろうって言われていた

んだけれど……」

由麻のお母さんの顔が、一層悲しみに包まれる。

「……事故にあってから四日後に、容体が急変したのよ」

「四日……?」

「ちょうど、ゴールデンウィークが始まった日……だったかしら」

「……え……?」

「それから一週間くらい……生死の境を彷徨っていたの」

「……ちよっと……待ってくれ。」

ゴールデンウィークの初日から……一週間?

それって……俺がゆまと一緒にいた期間じゃない……のか?

「ゴールデンウィークが終わって容体は少し安定したけれど……今もまだ、意識が戻らないままで……」

由麻のお母さんの目に、うつすらと涙が浮かび上がる。

けど俺は、そんな事に気付いてもしない程……動揺していた。

じゃあ……何か?

俺がゆまと出逢って、一緒にいた一週間

由麻は、生死の境を彷徨っていた?

は……はは……まさか。まさか……な。

「こんな物を見つけないければ……」

不意に、由麻のお母さんは視線を逸らした。

その声に呼応するように、俺はその視線を追う。

「……由麻もあんな事故に巻き込まれなかったでしょうに……」

そこには、小さな机が備え付けられていた。

俺が立ったら、腰に届くか届かないかくらいの小さな机。

その上に、ひっそりと置かれていた物が 視界に入る。

……嘘……だろ……?」

「ごめんなさい!」

「え?」

「すみません! 俺、帰ります!」

突然の叫びに驚いたままの由麻のお母さんを尻目に、逃げ出すよ

うに病室を走り去る。

曲がり角を曲がり、近くの通路から階段へと向かう。

途中、走る俺に気付いた看護師に注意をされながらも、それを無視して階段を上り、屋上へと跳び出した。

「……はぁッ……はぁッ……はぁッ……」

肩で息をしながら、フェンスにもたれかかるように前に倒れる。

フェンスに手がブツかった反動で身体が回り、そのままフェンスに寄りかかって地面に崩れ落ちた。

「……はぁッ……はぁッ……」

何て事だ。そんな事があり得るのか。あつていいのか。

心の中は、そんな言葉で一杯だった。

由麻の病室で見た物が、目の奥に焼き付いて離れない。

机の上に置かれていたのは

天使の翼の形をした、片翼のキーホルダーだったんだ。

第玖話：急変

それからの事は、実を言うとはよく覚えていない。
どこをどう帰って来たのか。俺は、自分の病室へと戻って来てい
た。

いつの間にか陽も落ち、辺りが暗くなる。

その内に消灯時間も過ぎて、明かりもなくなった。

俺は、自分のベッドの上で……おぼろげに天井を見上げていた。

不思議なもんだ。真っ白なはずの天井が、辺りの闇に浸食されて
黒く見える。

……まるで、俺の心みたいに。

「……そんな訳、ねえだろ」

そんな言葉が、口について出る。

一度きりじゃない。部屋に戻って来てから、もう何度口にしたか
自分でも分からないくらいだ。

もう一度、目を閉じて思い浮かべる。

由麻の病室。ベッドの脇。小さな机の上にひっそりと置かれた……

……キーホルダー。

天使の翼の形をしていた。

片翼だった。

つけられた鎖が、引き千切れた跡があった。

目を開けて、自分のベッドの脇を見る。

昨日、孝明と清耶が届けてくれた、俺の鞆。

その鞆につけられた……キーホルダー！

天使の翼の形をしている。

片翼。

つけられた鎖が、引き千切れた跡がある。

「……ぎ……ッ！」

見ているのも嫌になって、鞆からそのキーホルダーを引き千切る。

たかが安物のキーホルダーだ。少しの力で簡単に千切れた。
そのまま、真下のゴミ箱に思い切り投げ入れた。

「……はぁッ………はぁッ………」
ふざけるな………そんな事あつてたまるか。

何であれがあそこにあるんだ。

あれは………俺のキーホルダーだ。

もう二週間近く前に落とした。学校の帰り道。たぶん、鞆を振り
回してた時だ。

その時鞆から思わず手を離して………地面に鞆を落とした。
今更思い出した。たぶんあの時だ。

あの時に、鞆からキーホルダーが片翼　千切れた。

それを由麻が拾った？

拾おうとして事故にあつた？

何で。どうして。

それが二週間前の出来事。

その後、ゴールデンウィークの初日に………ゆまが俺の前に現れた。
一方で………由麻の容体は急変した。生死の境を一週間も彷徨い続
けた。

一週間後。ゆまが俺の前から消えた。

逆に、由麻の方は容体が少し安定したと言う。

ナンデ。ドウシテ。

俺のせいで、由麻は事故にあつたのか。俺が、道端にあのキーホ
ルダーを落としたから。

俺のせいで、由麻は生死を彷徨つたのか。俺が、ゆまに出逢つた
から。

………だとしたら。

俺のせいで、由麻は目覚めないんじゃないのか。

例えば、生命力なんてものがあるんだとして。

由麻が、”ゆま”として俺の前に現れて。

俺と一緒に過ごした一週間で、それを使い果たしてしまっただんじ

やないのか。

仮に、由麻の身体から抜け出た魂みたいなものが”ゆま”なんだとして。

俺と出逢った事で、その存在に気付ける奴を見つけて。

”ゆま”が身体に戻れないように、引き止めてしまったんじゃないのか。

詳しい事は分からない。もしかしたら見当外れなのかもしれないけれど。

今まで考え続けた何もかもより、この仮説が一番筋が通る。

物的証拠なんて何一つない。それが正しいと証明する何かがある訳でもない。

それでも。

今まで考え続けた何もかもより、この仮説が一番納得出来る。

認めざるを得なかった。

「ふ……つざけんな……ッ！」

認めたくない。認める訳にいかない。認められる訳がない。

嘘だ。嘘だ。嘘だ。

そう、心に強く思っているのに。

そう、信じたくてしょうがないのに。

そう、声を大にして叫んでしまいたいのに。

頭の中で、自分自身がそれを……認めてしまった。

俺なんだ。

由麻を事故に遭わせて。

由麻の容体を悪化させて。

由麻の意識が戻らなくしたのは。

この、俺なんだ。

ゆまの……いや、由麻の顔が頭に浮かぶ。

ゆまの名前は、ゆま！

ねえねえ。あなたの名前は何て言うの？

ゆーまかー。ゆまの名前に【う】を付けたんだね

やめる。

大丈夫だよ

一人じゃないから

ゆーまがいるから

やめる……ッ！

ゆーまは一人なんかじゃないよ！

だって、ゆまがいるもん！

ゆまがいるよ。ゆーまの傍に、ずっといるよ。だから、ゆー

まは一人じゃないんだよ

やめるッ！！

布団を広げ、頭から被る。

それでも、考えが止まってくれぬ訳はない。

あ。だからって無視するとかやだよ？

お前の顔に影が見えるのだ

彼女に振られでもしたんだろー？

まだ意識が戻らないの

ゆーまの意地悪！

お前が何も語ろうとしないからだ

お前等を繋いでた枷みたいなもの、何かの拍子に外れたん

だよ

こんな物を見つけないければ……

やめる！ やめる！ やめる！！

由麻もあんな事故に巻き込まれなかったでしょうに

「やめるおおおおッ！！」

「おい！ 何だよ！ うるせえぞ！」

ガンガンとカーテンの柱を叩かれ、ハッと我に返る。

気が付くと、身体中が汗でびっしょり濡れていた。

すみませんと謝りながら、服を着替える。

……が。心は晴れない。

何か、飲もう。そう思った。

静かに病室を出る。

俺のいる病室は、東病棟の端だ。部屋を出ると、すぐ脇が行き止まりになっていて、そこには 窓があった。

その窓に、目をやる。

向かい合った、西病棟が見える。

同じ階。端から真正面に見えるはずの病室。

…… 由麻がいる、あの病室。

俺が深い闇の中に墮とした女の眠る場所。

「……く……ッ！」

見ているのさえツラくて、目を逸らす。

その場を後にして、通路を歩いて行った。

この病院は、アルファベットの【C】の字を書いてちょうど中心に当たる場所にナースステーションがある。

病室からだ、そこに向かうまでの途中に、自動販売機があった。入院してからの四日間、しばしばコーヒを買った自動販売機。

だが、今はコーヒを飲むような気分じゃなかった。

一刻も早く、眠ってしまいたい。

そうすれば考える事もない。悩む事もない。起きてからまた続くんだろうが、ひとまず寝てしまえばその間は安泰だ。

そう思って、ホットミルクのボタンを押した。

ガシャン、と病院の消灯時間を一切考慮していない音が鳴り響く。辺りが静かな分、この音が耳障りな程にうるさく感じた。

近くのベンチに腰掛け、ホットミルクの蓋を開ける。

その時だった。

「……はあ。何とか一命を取り留めたわ……」

「ご家族には連絡したの？」

「当たり前よ。お母様がさっきまでいたけど……流石にお帰りになったわ。時間も時間だし、容体はちゃんと説明したしね」

看護師達が話をしているのが聴こえた。

ナーステーションに近いからか、辺りに音が一切ないからか……

その声は驚く程よく届いた。

「でも……矢野さん。この四日間くらいは容体も安定してたのに」

矢野さん？ 矢野さんって……まさか。

「ホントよ。先週一週間も不安定な状態が続いたのが嘘みたいだったのね」

先週。一週間。不安定だった。

節々に出て来る単語から、聴こえている話が、由麻に関する事である事が分かる。

……待て。

さっき、あの人達何て言ってた？

何とか一命を取り留めた

この四日間くらいは容体も安定してたのに

これらの言葉から想像出来る話は……一つしかなかった。

由麻の容体が、急変したんだ。

何でだよ……また俺の前に”ゆま”が現れた訳でもないのに……！

心臓が激しく脈打つ音が聴こえる。血の流れが勢いを持ち、身体中を駆け巡るのを感じた。

頭の中で、声が響いた。

運命とは自らの歩む道。転機に差し掛かった者は自らを試されるのだと言う。そこで道を違えれば……二度と戻っては来られなくなる

転機とは選択するべき箇所。お前は選ばなければならぬはずだ。何をかは分らないが

まだ、選択の時は来ていないらしい。その時を……見誤るな
その後、俺の頭を支配したのは……とても簡単な予想だった。

……このままだと、由麻に会えなくなるかもしれない。
そう思った瞬間。

俺の身体は動き出していったんだ。

「……はあ……はあ……」

昼に来たばかりの西病棟。その端近く。

目的の場所に到達するのに、それ程時間はかからなかった。

時間が遅いので、人がほとんどいないというのもある。何度か巡回の看護師に出会いそうになったが、隠れる事で事無きを得ていた扉に、手をかける。

瞬間。本当にいいのか、っていう漠然とした不安が頭をよぎった。何か気になる事があった訳じゃなかった。ここまで来てしまった以上、それをやらずに帰るなんて考えられなかった。

なのに。

その不安は、形にもならないまま……俺の身体を押し戻した。

扉に手をかけたまま、後ろを振り返る。

誰も、いない。

昼間はあんなに人がいたのに、誰もいない。

俺が一人で……ポツンとそこにいる。

扉を見つめ、目を瞑る。

何を選ぶにしろ、お前自身が歩む道だ。後悔をしないよう……自身の全てをかけて選ぶ。でなければ、お前はお前自身を恨み続ける事になってしまう

お前は一人じゃねーんだからな。俺はバカだけど……一緒に
悩むくれーの事は出来っから！

ゆまがいるよ。ゆーまの傍に、ずっといるよ。だから、ゆー

まは一人じゃないんだよ

……そうだよ。そうだよな。

一人じゃ……ねえんだよな。

意を決して、もう一つの手を扉にかける。

頑強なはずのないそこを……両手で静かに開けた。

第拾話：悠馬と由麻

病室の中は、それ程暗くはなかった。

窓は閉まつてたけど……カーテンは開けられていた。

窓から、月明かりが差し込んでる。

その月明かりに照らされるように……由麻が寝ていた。

「……由麻……」

その名を、呼ぶ。

”ゆま”でなく、”由麻”。俺が出逢った事のないはずの少女。

この二週間近く、俺の記憶の大半を奪っている少女。

目の前にいるのは、”ゆま”じゃない。俺が落としたキーホルダ

ーのせいで事故に巻き込まれた……”由麻”だ。

彼女の寝るベッドに、近付く。

すぐ脇に、小さなパイプ椅子があった。昼間、お母さんが座って

いたものだ。

そこにゆっくりと腰かける。

「……久し振り……は、変だよな。初めまして……って言うのが正しいのかな」

彼女の顔を眺め、口を開く。

”ゆま”と別れてから、一週間も経っていない。

”由麻”には、今日の昼間会ったばかりだ。

なのに……目の前に眠る少女の顔は、妙に懐かしくて……妙に新鮮だった。

初めて”ゆま”に出逢った時、彼女に名前を聞かれた事を思い出す。

ねえねえ。あなたの名前は何て言うの？

「俺は……悠馬。 神名悠馬」

ゆーまかー。ゆまの名前に【う】を付けたんだね

「……何でお前基準なんだよ。単に名前がちょっと似てるだけだろ」

あの時思った言葉を口にする。
それから……言葉が溢れ始める。

「あの時……ゆまに初めて出逢った時さ。俺……夢だと思った。お前の事ほったらかしにして……寝直したよな」

由麻は、反応しない。

「結局、寝直そうが頬をつねろうが頭を壁に打ち付けてみようが……お前は消えなかった。ちゃんと覚えてる。お前は……確かにそこにいた」

眉をひそめる事もなく。

「色んな所に行ったよな。ゲーセンとか。映画館とか。遊園地とか……ミラーハウス覚えてるか？【エンゼルフォール】にお前が乗れなくて……膨れてるお前を連れてったよな」

口元が揺れる事もなく。

「明日から学校つてなつて……俺、どうやってお前にクラスメイトを紹介しようか、色々考えてたんだぜ？ なのにお前消えちまって……本気で頭ゴチャゴチャになつちまってさ。クラスメイトと喧嘩したりもした……仲直りしたけどな」

ピクリとも動く事なく。

ただただ……その場で横たわっていた。

「……く……ッ」

歯を噛み締める。

ダメだ。俺が泣いたりしちゃダメなんだ。こいつの前で、そんな事出来ない。

こいつは、俺の前で泣いたりしなかつたんだから。

「……なあ、由麻……」

涙を堪えながら、言葉を紡ぐ。何か喋っている方が、堪えられるような気がして。

「俺さ……お前に言いたい事があるんだ」

そっと、手を伸ばす。

昼間お母さんがやってたように……由麻の頭にその手を置く。

「正直に言つとな……俺、お前の事、少し面倒だなんて思ってた」
手を、軽く揺らす。

俺の手の動きに合わせて、由麻の髪がふわりと揺れる。

「何て言うかさ。無駄に明るいいし。こっちの言う事聞いてくれねえし……ホント厄介な奴だと思ってたよ」

由麻の髪は、思っていた以上に柔らかかった。ちよつと引つ張つたらすぐに抜けてしまいそうなくらい。

手が、目の脇を通過する。

「お前のせいで、遊園地じゃ一人席なんてもん体験したしな。あんな体験、二度と御免だ。子供に指差されたりしたんだぞ、俺」

俺の手が由麻の輪郭をなぞり

「……けど」

やがて、頬へと到達する。

「お前がいなくなつて……色々悩んで考えて……よく分かった。お前が、俺にも知られないように……凄く頑張つてたんだって事。怖くて、ツラくて、苦しかったはずなのに……お前はあんなにも楽しそうにしてたんだよな」

頬から離し、由麻の手を握る。

小さな手だ。俺と比べたら随分と小さい。小さくて柔らかくて……弱々しい。

こんな手をした奴が、あんなに頑張っていたのか。

「お前……すげえよ。俺なんかと比べもんにならねえくらい……ホントすげえ。もうすげえしか言葉が出て来ねえ。それから……ずっと……」

途端、自分の頬を何かか伝つのが感じた。

「ずっと……謝りたくて……」

涙、だった。堪えられなかったんだ。

一度流れ始めた涙は、まるで噴水の如く溢れていく。

「ホントに……ごめん……ッ」

そうして涙と一緒に……言葉さえも、堰き止める事が出来なくな

った。

「お前の事……面倒だなんて思ったりしてごめん……お前の事……厄介だなんて思ったりしてごめん……」

溢れ出した感情は。

「お前の事……分かってやれなくてごめんッ！ もっと色んなトコに連れてってやれなくてごめんッ！ お前の話、ちゃんと聞いてやらなくて……ごめん……ッ！」

堰を壊して尚も激しく。

「お前に……出逢っちゃまって……ごめん……なさい……ッ」
一度壊れた堰は。

「俺が出逢わなきゃ……こんな事にはならなかったかもしれないのに……ッ」

何の意味も成さず。

「もう……お前の前に姿を現したりしないから……」
溢れ出る流れと共に。

「だから……お願いだから……」
粉々に、砕け散って行った。

「……もう一度……笑ってくれよ……ッ」
静寂が、辺りを支配する。

由麻が吸入器を通して呼吸をする音と俺の息遣いだけが、この空間に響いていた。

「……うくッ……」

喉の奥が妙な音を作り出す。

それすらも、押さえる事が出来ない。

目から溢れ出した雫が頬を伝い……重力に引かれるまま、落ちる。その雫は……由麻の頬を濡らしていた。

「……お願い……だから……」
思わず目を閉じ、懇願するように頭を垂れる。由麻の手を握る手に、力が籠る。

こんな事を言っても、何かが変わるなんて思っていないかった。

ただ、言わずにはいられなかった。どうしても謝りたかった。例え、由麻が聞いていなかったとしても。

だから。

この時は、それまで感じた事がない程……驚いた。

「……え？」

一瞬だった。刹那って言葉がよく似合うくらい……本当に瞬間だった。

由麻の手を握る俺の手が……ほんの少しだけ。

ほんの少しだけ……握り返されたような気がしたんだ。

「……由麻……？」

由麻の顔に目をやる。

特段、変わったようには見えなかった。

相変わらず目は閉じたままだし、動きらしい動きは見られなかった。

そう、思った

「……由麻……」

次の、瞬間。

「……ゆー……ま……？」

由麻の口が 動いた。

それまで、力らしい力が入る余地すら感じられなかった由麻の目が。

少しずつ。

覆った氷が溶けていくように。

開いて……いったんだ。

「……ゆーま……」

「由麻！？」

由麻の声はあまりにもか細かった。

吸入器なんてつけていたから、余計に声が籠っていたのもあるかもしれない。

俺は思わず、耳を由麻の顔に近付けた。

「……来るのが……遅いよ……」

「え？」

何でそんな事を言われたのか、俺には分からなかった。

由麻は、続ける。

ゆっくり。それでも、徐々にはつきりと。言葉を紡いでいく。

「ずっと……待ってた……ゆーまが呼んでくれるの……」

「お前、俺の事が分かるのか!？」

ゆっくり、慎重に頷く。

「分かるよ……ゆーまの事はゼーんぶ……見たし……聞いたから……」

……

「由麻……俺は……ッ」

涙が、止まらなかった。

由麻が目覚めてくれた。それが嬉しかった。その気持ちは嘘じゃない。

けど、それだけじゃない。

「ごめん……俺のせいで……事故に遭って……身体に戻れなくて……」

……

申し訳のない気持ちで一杯だった。

「俺のせいなんだ！俺が……あのキーホルダーを落としたりしたから……お前が！」

喚き散らすように叫んだ。

泣いていたせいもあったんだろう。ほとんど、自分でも何て言ってるのかが分からなかった。

それでも、言いたかった。謝りたかった。

そんな俺を見て、由麻は。

「……ゆーま……」

その時の由麻の顔を、俺は今でも忘れられない。

その時、確かに由麻は 笑った。

「ありが……とう……」

それは、あまりにも小さな、微笑み。

「ゆーま……ゆまね……ずっと見てたんだよ……」

それは、あまりにも弱々しい、微笑み。

「ゆーまは……ずっとゆまの事……考えてくれてたよね……」

それは、あまりにも儂い、微笑み。

「……だからね……」

さりとして。

「……ゆーまが引き止めてくれたから……ゆま……戻って来られたんだと……思うの……」

それは、静かで強く　そして優しい、微笑みだった。

「由麻……ッ」

「……えへへへ……またゆまに会えて……嬉しい……だろー……」

”ゆま”だった時のように、軽い憎まれ口を叩く。

前の俺なら、そんな事ある訳ねえだろって簡単に突き放してたはずだ。

けど、もうそんな事が出来る訳がない。

「ああ……ああ……ッ！　嬉しいよ……嬉しいさ！　悪いか！」

「あはは……ゆーま……顔グツチャグチャだあ……」

「グチャグチャだよ！　ああグチャグチャだよ！　誰のせいだと思つてんだちきしょう！」

「……ゆまの……せいじゃない……もーん……」

さつき。俺は、こいつは”ゆま”じゃなくて”由麻”だと言った。

それは、どうやら間違いだったらしい。

こいつは、”由麻”であり……”ゆま”でもあるんだ。

「……ん？」

繋いだままの手を、クイと引つ張られる。

「どうした、由麻？」

「……あのね……ゆーま……」

クイクイと引つ張られる俺の手。

何だ。もつと寄れって事か？

「何だよ。どうしたんだ」

それから由麻は大きく息を吸って。

まだ力が入り切らなくてツラそうな声で。

それでも、いつも通りだとさえ思える、あの明るい声で。

俺の耳元で言ったんだ。

「ゆまに出逢ってくれて……ありがとう」

その言葉を聞いて……俺は、自分を押さえる事が出来なかった。

寝ている由麻をそっと抱き起こし……力強く抱き締めた。

二つの音が聴こえた。

俺の心臓の鼓動。

そして 由麻の心臓の鼓動。

トクントクンと鳴り響く音の重なりを耳にしながら。

ふと、窓の外を見上げる。

真っ暗な闇の中に ただ一つ。

満月だけが……眩く輝いていた。

第拾壹話：二人の日々

「……………あぢい……………」

奇跡的に由麻が目覚めてから 二ヶ月。

梅雨なんてのもとうに明けた。強い日差しが降り注ぎ、蝉の音がけたたましく耳に響く。

もう 季節は夏を迎えていた。

俺がいるのは、街中にある噴水広場。ここは本当に日本なのかと疑問を持ちたくなる程、無駄に豪華な場所の片隅だ。

少しでも暑さを凌ぎたいと水のある近くにいる訳なんだが……………やっぱり暑いもんは暑い。

そんな中で俺は、ブーツと突っ立っていた。

何故そんな事をしているのかと聞かれれば……………答えは簡単だ。

「いつになったら来るんだよ……………あいつ」
時計に目をやる。午後一時四十分。

……………いつだったかと同じ時間にここで待ちぼうけくらってたな、俺。

そのいつだったかの事を思い出して後ろを振り向く。

……………木陰で寝ていたオッサンと目があつた。

「あ……………あはは……………」

睨まれ、思わずビビる。

すんませんっしたね……………邪魔して。

再び噴水の方に目をやった。

由麻が目覚めたのは、医者にしてみればあり得ない事ではなかったらしい。

身体にそれ程大した外傷はなかった。ただ、何らかの要因で意識だけが戻らない状態だったのだと言う。

後は、本人の生命力の問題です……………という奴だ。

でもって、肝心の由麻はと言うと。

話を聞く限りでは、本人は身体の傍に戻っていたらしい。

俺と離れられなかったのと同じように、今度は身体から離れられなくなっていたんだと。

それなら何で俺が行った時に出て来なかったんだとツッコんでみたら

「呼んだんだよ！ 思いつ切り叫んだのに、ゆーまが気付いてくれなかったんだもん！ ゆまのせいじゃないやい！」

だ、そうだ。

呼ばれた記憶なんて……ねえんだけどな。

……それにしても。

今考えてみても、俺達は本当に不可思議な体験をしたものだ。

俺と由麻にしてみれば目の前で実際に起こった事だから、否定なんて出来ないけれど。

たぶんこの話をして、空想・妄想の類だつて思われるに決まってる。現実を起こった事だつて信じてくれる奴は……きっと、指で数えられる程度だろう。

大体、俺達自身 分かっていない事があまりにも多い。

結局の所、あの”ゆま”という存在は、由麻の何だったのか。

何故、”ゆま”の姿は誰にも見えず、その声は誰にも聴こえず、その存在は誰にも気付かれなかったのか。

そんな”ゆま”の存在に……何故、俺だけが気付く事が出来たのか。

それだけじゃない。

どうして、”ゆま”は俺から離れる事が出来なかったのか。

どうして、”ゆま”は俺の所に現れたのか。

どうして、あのゴールデンウィーク最終日の翌朝……”ゆま”は、消えたのか。

はつきり言つて分からない事だらけだ。由麻の話聞いても……その疑問に、納得のいく答えは出そうになかった。

もしかしたら。

あの一週間の出来事は、俺と由麻が見た　夢、だったのかもし
れない。

そう考えたって、何も不思議な事はない。そうだと誰かに言われ
たら、そう信じてしまいたいそうだ。

しかし、だ。

そんな事はもう、どうでもいい。

「ゆうーまあーっ！」

やれやれ……やっと来たな。

大分焦ったのか、物凄い勢いで噴水広場に駆け込んでくる、一つ
の人影。

「はあ……はあ……間に合った？」

「んな訳ねえだろ！？　今何時だと思ってるんだ！？」

「ちえ。惜しかった」

「全然惜しくねえっつの！　待ち合わせ一時だったののお前だろ
！？　もう四十分も過ぎてるわ！」

相変わらず俺にツッコミの限りを尽くさせる。

言わずもがな。矢野由麻、その人だ。

由麻は、胸の前で手を合わせながら言うてくる。

「ごめんね！　出掛ける前にちよこおーっと始めたら、止まらなく
なっちゃってー！」

お前にとって、ちよこおーは四十分なのかよ。

「ごめんね、ゆうま」

「……あーもう。いーよ。いーい。んで……何を始めたって？」

「あ、そうそう。これこれ」

そう言っって、持って来た鞆を探る由麻。

そこから取り出した物に……俺は、凄まじく見覚えがあった。

「これ……って……」

由麻の手が差し出してきた物。

それは　天使の翼の形をしたキーホルダーだった。

それも、片翼じゃない。双翼がちゃんと揃っている。

「……どうしたんだよ……これ……？」

一つは、由麻が持っていた。俺が落として、由麻が拾った物。そしてもう一つは……俺が病室のゴミ箱に捨てたはずだった。

「えへへ。何でだか教えて欲しいーいー？」

由麻の瞳が悪戯に光る。

「……教えて欲しいです」

くそ。俺はどうしてこう好奇心に弱いんだ。

「あのねー。看護師さんに、頼んでおいたの」

「……は？」

何を？

「ゆーまの部屋に、きつとこれと同じ物があるから、持って来て下さいって。もしかすると捨てちゃったかもしれないから……って」

「……何でそんな事を？」

「ふっふっふ。ゆまの推理力を侮っちゃあいけないんだよ、ゆーま」

「

侮りてえ。とてつもなく侮りてえ。

「ゆーまにとつて、これはあんまり思い出したいくない物かもしれないって思ったんだよ。見ていたくもないかもしれないって。だから、捨てちゃってるかもしれないなーって」

……でも当たってるから侮れねえ。

「でねー……ほい！」

由麻が手を傾け……キーホルダーが滑り落ちそうになる。

だが、それが地面に落ちる事はなかった。

「じゃじゃーん それをネックレスにしてみたのでしたあ」

由麻が自慢気に見せびらかしてきたそれは……なるほど、ネックレスだった。

キーホルダーの鎖を外して、代わりに紐が通されていた。

単なる紐じゃなかった。何本もの違う色の糸を編み合わせて出来た……虹色の紐。

「どう？ どう？ これなら見ても嫌な気分にならないでしょー？」

腰に手を当ててふんぞり返る由麻を見ながら　俺は思っていた。
やっぱり、どうでもいい。

不思議な体験だった。分からない事も多く残ったままだ。
けど。

由麻が、俺の目の前にいる。

こいつが、俺と一緒にここにいる。

それだけで、気分が楽になっていくから。

それだけで、心が安らいでいく気がするから。

だから……それだけでいいんだ。

「……ありがとな、由」

「おー！？　そこに見えるは悠馬と由麻ちゃんじゃあーりませんか
ーッ!?」

……ゲッ。

このやたら面倒くさそうな声は……。

「よー悠馬！　暑さに負けじとこっちでもアツアツってかあ!？」

かあー、羨ましーね、ホントに!」

「あ、せーや君だ」

「ういつす由麻ちゃん！　付き合い始めたからってダメダメよー？

悠馬だつて所詮は男！　由麻ちゃんみてーな可愛い子と一緒に来

たら、頭ん中でどんなやらっしー事考えてやが」

「清耶……それ以上くだらねえ事言いやがったら、てめえの脳天力

チ割るぞ！　……孝明が」

「そ、それは勘弁してくれえッ!」

「そんな事はせん」

清耶の後ろから孝明が顔を出す。

何だ、いたのか。こいつも。

「よ、孝明。今日も清耶のお守りか？」

「いや。先刻清耶から突然電話があつて、一応会いはしたのだが…

…今日は……ちょっとな」

ん？　何だ？　何か孝明にしては妙に歯切れが悪いような。

「……あいつと一緒になので……な」

孝明が目線で示した方に目をやる。

一人の女子が、そこにいた。

……ああ。なるほど。あれが例の彼女さんって訳か。

「お前も大変だな」

「そちらもな」

互いの苦労を分かり合って苦笑する。

こんな風に笑い合う事が出来るようになるなんて……二ヶ月前は思ってもいなかったもんだ。

「いよっし！ こんだけ揃ったんならやるこた一つ！ カラオケ行って、皆で盛り上がるうっぜーい！」

清耶のテンションがはち切れんばかりに上がって行く。

あー、面倒くせえ。これからする事はもう決まってんのに。

「……由麻」

「ん？」

「逃げんぞ」

「オーツケー」

それだけの合図で、俺と由麻は同時に走り出す。

視界の隅では、孝明が彼女の手を引き、同じように走り出していった。

「あれ！？ 皆どこ行くんだよ！？ ちょっと待ってよ！ 独りぼつちにすんなあーッ！！」

悪いな、清耶。今度どっかで埋め合わせするって。

「ねえ、ゆーまー！」

「ん？ どうした？」

走りながら、由麻が俺に尋ねてくる。

「今日って、結局どうするの？」

ああ。そうか。言っただけじゃなかったっけ。

「ヘヴンズランドに行こう。いつか乗れなかった【エンゼルフォー
ル】……乗りたいだろ？」

「ホントに！？ やったあ」

由麻の手を引く。

二人の手の中に、あのキーホルダー もとい、あのネックレスがあった。

「そしたらさ、【トワイライトミラージュ】にも入るうね！」

「ああそうだな……曲がるぞ！」

絶妙なコンビネーションで角を曲がる。

物陰に隠れて、身を潜める。何かのドラマみたいだな。

ようし、これで清耶は撒いたな。

「ゆーま……動かないでね」

「……え？」

気付くと、由麻の顔が目の前にあった。

とてつもなく、近かった。

由麻の身長は俺よりも小さかったけど……多少無理な体勢で物陰に隠れたせいか、高さの差はほとんどなかった。

由麻の息遣いが聴こえる。

心臓の鼓動が、やたら激しくなっていくのを感じた。

おい、待てよ。こんなトコで。人の目もあるんだぞ。

やめ

「はい、出ー来たッ」

「……へ？」

寸前まで近付いて、由麻は離れた。

いつの間にか繋いでいた手は放されていて その手には、例のネックレスが一つあった。

首元を、見る。

虹色の紐が、俺の首から下がっていた。

「何されると思ったのよー？」

「え……いや……それは……」

言えるかよ、バカ。

キスされると思った、なんて。

「あはは！ ゆーまには後でかけて貰おうと！」
そう言っつて、由麻は歩き始める。

その姿を眺めながら……俺は、思っていた。
もう、大丈夫。

俺達は、一人なんかじゃない。

いつだって、俺達は傍にいるから。

だからもう……大丈夫だ。

「待てよ、由麻！」

「早くおいでよー！ ゆーまー！」

立ち上がり、俺は由麻を追う。

その向こうで、由麻が俺を呼ぶ。

俺がいて。

由麻がいる。

俺達の日々は、これから始まるんだ。

「観覧車にでも乗ったら、してあげよっかな」

「……へ？」

「えっへへー、何でもなーい！」

夏の日差しが、俺達に燦々さんさんと降り注いでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2276t/>

ゆまゆま！

2011年7月22日03時43分発行